

# 日本文法教本

副本



東京外国語大学  
図書館蔵書

673646

平成 23 年度

まへがき

一、本書は、日本語を母語としない者で、日本語を一通り話し得る者を対象として編纂しました。

一、本書は、日本語の主要な文法的事実についての的確な知識を得させ、実際に日本語を理解し運用する能力を養はせる目的を以て編纂しました。

一、本書に述べるところは、現在の口語全般にわたつてゐますが、話し言葉と書き言葉との間に差異のある場合は、機会あることに之をあきらかにしました。

一、本書に挙げた例のうち、發音の紛れやすい言葉には、片假名の字體を發音符號に用ひて、その正しい發音を示しました。

一、本書は、授業時數每週一時限、一學年で教授するやうに編纂しました。授業時數に増減のある場合には、教授者は適宜工夫を加へて取扱はれるやう、希望します。

一、本書の取扱については、日本文法教本學習指導書に委しく説明してあります。教授者は同書により、本書編纂の趣旨をよく理解して、指導に遺憾のないやう、希望します。

目次

|               |    |
|---------------|----|
| まへがき          | 一  |
| 第一章 日本語の文     | 一  |
| 第二章 名詞        | 三  |
| 第三章 數詞        | 六  |
| 第四章 代名詞       | 一一 |
| 第五章 動詞        | 一三 |
| 第一節 活用        | 一三 |
| 第二節 各活用形の主な用法 | 二九 |
| 第六章 形容詞       | 四一 |
| 第一節 第一種形容詞    | 四一 |
| 第二節 第二種形容詞    | 五三 |
| 第七章 副詞        | 六五 |

|      |                 |     |
|------|-----------------|-----|
| 第八章  | 接續詞             | 七〇  |
| 第九章  | 感動詞             | 七四  |
| 第十章  | 助動詞             | 七六  |
| 第一節  | 助動詞の活用          | 七六  |
| 第二節  | 「ない」            | 七八  |
| 第三節  | 「ます」            | 八二  |
| 第四節  | 「れる」「られる」       | 八四  |
| 第五節  | 「せる」「させる」       | 九一  |
| 第六節  | 「たい」            | 九五  |
| 第七節  | 「た」「た(だ)」       | 九八  |
| 第八節  | 「だ」「です」         | 一〇三 |
| 第九節  | 「う」「よう」         | 一〇六 |
| 第十一章 | 助詞              | 一一四 |
| 「か」  | 「が」附「けれども」「けれど」 |     |

附 録

|     |        |
|-----|--------|
| 第一表 | 動詞活用表  |
| 第二表 | 形容詞活用表 |
| 第三表 | 助動詞活用表 |

|          |       |           |
|----------|-------|-----------|
| 「から」「まで」 | 附「ので」 | 「さへ」      |
| 「しか」     | 「だけ」  | 「たり」      |
| 「て」      | 「で」   | 「ても」附「とも」 |
| 「と」      | 「な」   | 「に」       |
| 「の」      | 「のに」  | 「は」       |
| 「ば」附「し」  | 「ばかり」 | 「へ」       |
| 「も」      | 「より」  | 「を」       |

# 日本文法教本

## 第一章 日本語の文

主語、述語

〔一〕

花が主語咲く。述語

鳥が主語鳴く。

飛行機が主語飛びます。

水が主語流れます。

来ます。

右のやうに、日本語の普通の形の文では、主語が述語の前に

主語、客語、述語

〔二〕

太郎が主語本を客語読む。述語

牛は主語草を客語食べます。

親牛が主語子牛に客語お乳を客語飲ませてゐます。

先生が主語繪を客語私に客語下さいました。

右のやうに、日本語の普通の形の文では、客語は述語の前に來ます。

[III]

修飾品  
美しい花が咲きました。  
これは鳥の羽です。

羽<sup>※</sup>です。

みんながいっしょうけんめいに働く。

働ハタく。

花が大變きれいです。

きれいです。

右の例で分る通り、普通の場合には、修飾語は修飾される語の前に來ます。

〔四〕日本語の文を文字に書き表すには、次の例のやうに、文の切れ目には○を附け、文の中の小さい切れ目や紛れやすいところには、を附けます。また引用した文や特に注意すべき言葉の前後には、「を附けるのが普通です。

○を「まる」、  
、を「てん」といひ、  
「を」を「かぎ」といひます。

## 第二章 名詞

〔五〕日本語の單語(語ともいふ)は、

名詞 數詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞 接續詞 感動詞  
助動詞 助詞

の十種に分けられます。

〔六〕

日本 東京 太郎 野口英世

犬繪海

家族 國民 軍隊

パン 牛乳 油 水  
いのち 思想 用事

右のやうに、地名・人名や事物の名を表す語を「名詞」といひます。

名詞は主語になる

〔七〕

太郎が 繪を かきました。

あそこに 犬が ゐます。

軍隊が 通ります。

油が 燃えて ゐます。

用事は すみました。

右の例の「太郎、犬、軍隊、油、用事」のやうに、すべての名詞は主語になることが出来ます。この場合、下に「が」「は」などの語が附くのが普通です。

〔注意一〕 丁寧にいふために、次のやうに名詞の上に「お」を附けていふことがあります。

お茶 お菓子 お食事 お晝 おしまひ お隣

また尊敬や親愛の意味を表すために、人名の下に「さま、さん、君<sup>くん</sup>」などを附けていふことがあります。

小林さま 花子さん 山田君

〔注意二〕 名詞の中には複数を表す形のあるのがあります。例へば「先生がた」「子供たちは」「先生」「子供」の複数を表す形です。けれども次の例のやうに、他の語との關係の上では、「先生」と「先生がた」「子供」と「子供たち」の間に異なるところはありません。

中學校の 先生が お出でに なりました。

中學校の 先生がたが お出でに なりました。

あの 子供は 何を して ゐますか。

あの 子供たちは 何を して ゐますか。

〔注意三〕 名詞自身は格(Case)を示しません。格を示すには、例へば

太郎が 次郎の 家へ 行きました。

中村さんが 太郎に 本を やりました。

のやうに、名詞の下に「が、の、へ、に、を」などを附けるのが普通です。

(注意四) 名詞には「父、母」「兄、姉」「牡牛、牝牛」などのやうに、自然の性を區別する語がありますが、次の例のやうに、他語との接續の上で異なるところはあります。つまり日本語の名詞には、文法上の性(Gender)はありません。

私の 兄は 大阪に 住んで ゐます。  
私の 姉は 大阪に 住んで ゐます。

(注意五) 日本語には、冠詞(Article)はありません。

### 第三章 数 詞

数詞

〔八〕

茶碗が 一つ こはれました。

私は コーヒーを 二杯 飲みました。

第一回の 競走に 中村は 二等に なりました。

右の「一つ」は茶碗の数を表し、「二杯」はコーヒーの量を表して

主な数詞

みます。又「第一回」「二等」は順序等級を示してみます。このやうに数量を表す語や、数によつて順序等級を表す語を「数詞」といひます。

〔九〕 数を数へる主な語は、次の通りです。

(い) ひとつ ふたつ みっつ よっつ いっつ ひっつ なな

つ やっつ このつ とを

(ろ) 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

十一(10+1) 十二 十三……十八 十九

二十(2×10) 二十一(20+1) 二十二……二十八 二十九三

十(3×10) 三十一 三十二

四十 五十……八十 九十一……九十九

百(100) 百一(100+1) 百二 百九十九

二百(2×100) 二百一 二百九十九

三百 四百 八百 九百 九百九十九

特別な数詞

十までは右(い)により、十一以上は(ろ)によるのが普通です。

「一〇」子供が 三人 遊んで ぬ  
ます。

子供を 三人 つれて  
来ました。

本が 三冊 あります。  
馬車が 三臺 行きます。

本を 三冊 買ひました。  
馬車を 三臺 持つて  
ぬます。

同じく三の数を表すにも、右の例のやうに人は「三人」、本は「三冊」、馬車は「三臺」といひます。このやうに數へる事物によつて、

特別の数詞を用ひることがあります。

右の外、普通に用ひる特別の数詞は、次の通りです。

一年 二ヶ月 三日 四時間 五分 六秒 (以上、時)  
一メートル 二軒 一里 二町 三間 四尺 五寸 六分 (以  
上、長さ)

一圓 二十錢 (以上金額)

一匹 (獸、虫の類)

二羽 (鳥)

三冊 (本、雜誌、帳簿の類)

四本 (鉛筆、萬年筆、卷煙草の類)

六枚 (紙、數物の類)

七軒 (家)

「二」順序等級を表す數詞は、(八)で擧げたものの外、次の如き語  
があります。

順序等級を表す  
數詞

## 第一 第二 第十三

第一號 第二號 一號 二號

第一番 第二番 一番 二番

第一級 第二級 一級 二級

二つめ 三つめ

練習一 次の數を言つてごらんなさい。

|       |       |       |       |        |         |          |      |      |      |      |      |
|-------|-------|-------|-------|--------|---------|----------|------|------|------|------|------|
| 25    | 89    | 148   | 718   | 806    | 910     | 1128     | 1269 | 1308 | 5987 | 7023 | 9602 |
| 12345 | 16853 | 53902 | 70017 | 858962 | 4736851 | 38614579 |      |      |      |      |      |

次の文の―印の部分に適當な數詞におなほしなさい。

- (1) あそこに犬が―つゐます。
- (2) 私は雑誌を―つ買ひました。
- (3) 庭に鶏が三つゐます。―つはをんどりで、二つはめんどりです。
- (4) どなたか萬年筆を―つ持つてゐませんか。持つてゐたら私に―つ貸して下さい。
- (5) 山の下に、小さい家が十ばかりあります。

(6) うちでは兎を五つ飼つてゐます。二つはをすで、三つはめすです。

(7) 自動車が八つ續いて通りました。

## 第四章 代名詞

## 代名詞

## 〔一二〕

あなたは 中村さんですか。

これは 中村さんの 鉛筆です。

あそこに 中村さんが ゐます。

船は どちらへ 行きましたか。

右の文の「あなた」は「相手」を指し、「これは」は「鉛筆」を指してゐます。又「あそこ」は「場所」を、「どちら」は「方角」を指してゐます。このやうに、人事物場所及び方角の名をいはずに、それ等を指していふ語を「代名詞」といひます。

普通の代名詞

代名詞の用ひ方は、名詞と殆ど同様です

「二三」 普通に用ひる代名詞は、次の通りです

| 人                |                 | 第三 人 稱         |                |                |             |
|------------------|-----------------|----------------|----------------|----------------|-------------|
| 第一人稱             | 第二人稱            |                |                |                |             |
| わたくし<br>わたし<br>僕 | あなた<br>おまへ<br>君 | このかた<br>(このひと) | そのかた<br>(そのひと) | あのかた<br>(あのひと) | どなた<br>どのかた |
|                  |                 | これ             | それ             | あれ             | どれ          |
|                  |                 | そこ             | そこ             | あそこ            | どこ          |
|                  |                 | こちら<br>ち       | そちら<br>ち       | あちら<br>ち       | どちら<br>ち    |
|                  |                 | 方角             | 場所             | 事物             |             |

(注意二) 人の代名詞には複数を表す形があります。

第一人稱 わたくしども、わたくしたち、わたしども わたし  
たち、僕たち、僕ら

第二人稱 あなたがた おまへたち おまへら 君たち、君ら  
第三人稱 このかたがた、そのかたがた、あのかたがた、どの  
かたがた

けれども次の例のやうに、他の語との関係の上では、異るところ  
はありません。

これは あなたの 帽子ですか。

これは あなたがたの 帽子ですか。

本を 讀んだのは わたしです。

本を 讀んだのは わたしたちです。

(注意二) 代名詞自身は格を示さないこと、代名詞に文法上の性の無  
いこと等は、名詞と同様です。

第五章 動 詞

第一節 活 用

〔一四〕 小鳥が 鳴く。

ときどき 雨が 降る。

右の「鳴く」「降る」は、小鳥・雨が「どうするか」を述べてゐます。この「鳴く」「降る」のやうに、事物の動作・作用を述べる語を「動詞」といひます。動詞は「鳴く」「降る」の「く」「る」のやうに、すべてウ段音で終ります。

次の語はみな動詞です。

書く 脱ぐ 話す 立つ 買う 飛ぶ 休む 着る 見る  
投げる 食べる 植ゑる 来る 爲る

また次の文の「ゐる」「ある」も動詞です。

子供たちは 庭に ゐる。

学校は 町の 東に ある。

〔一五〕 この 鳥は 鳴かない。(鳴く、ない)

まだ 雨が 降らない。(降る、ない)

動詞を打消すには、これに「ない」といふ語を附けます。

動詞「鳴く」「降る」に「ない」を附けると、右の「鳴かない」「降らない」のやうに、「鳴く」「降る」が「鳴か」「降ら」となります。なほ數例を挙げませう。

行く、ない——行かない。 脱ぐ、ない——脱がない。

話す、ない——話さない。 使ふ、ない——使はない。

飛ぶ、ない——飛ばない。 休む、ない——休まない。

賣る、ない——賣らない。 立つ、ない——立たない。

練習二 次の動詞を打消になさい。

書く 咲く 漕ぐ 押す 出す 勝つ

習ふ 言ふ 並ぶ 運ぶ 進む 飲む

乗る 切る 待つ 笑ふ 眠る

〔一六〕 この 鳥は 鳴きます。(鳴く、ます)

ときどき 雨が 降ります。(降る、ます)

動詞に丁寧の意味を添へるには、これに「ます」といふ語を附けます。動詞「鳴く」「降る」に「ます」を附けると、右の「鳴きます」「降ります」のやうに、「鳴く」「降る」が「鳴き」「降り」となります。なほ數例を挙げませう。

行く、ます 行きます。 脱ぐ、ます 脱ぎます。

話す、ます 話します。 使ふ、ます 使ひます。

飛ぶ、ます 飛びます。 休む、ます 休みます。

賣る、ます 賣ります。 立つ、ます 立ちます。

(注意) 談話では、動詞に「ます」を附けた「鳴きます」「降ります」のやうな、丁寧な形を用ひるのが普通です。

練習三 練習二の動詞に「ます」をお附けなさい。

〔二七〕 小鳥が 鳴く。

ときどき 雨が 降る。

右の如く「鳴く」「降る」は、そのまゝの形で文の終に用ひます。

この場合の動詞は、ウ段音で終ります。(一四参照)

練習四 次の動詞を終に用ひて、短い文をお作りなさい。

吹く 飛ぶ 乗る 讀む 出す

習ふ 走る 泳ぐ 待つ 洗ふ

〔二八〕 この 鳥が 鳴けば、ほかの 鳥も 鳴きませう。(鳴く、ば)

午後 雨が 降れば、私は うちに ゐます。(降る、ば)

動詞を條件を表すに用ひる爲に、これに「ば」といふ語を附けることがあります。動詞「鳴く」「降る」に「ば」を附けると、右の例の「鳴けば」「降れば」のやうに、「鳴く」「降る」が「鳴け」「降れ」となります。なほ次の例をごらんください。

行く、ば 行けば 脱ぐ、ば 脱げば

話す、ば 話せば 使ふ、ば 使へば

活用  
活用形

飛ぶば 飛べば 休むば 休めば  
賣るば 賣れば 立つば 立てば

練習五 練習二の動詞に「ば」を附けてごらんさい。

「一九」以上の如く「鳴く」「降る」は、用ひ方によつてそれ／＼「鳴か、鳴き、鳴く、鳴け」「降ら、降り、降る、降れ」となります。このやうに動詞の形の變ることを「活用」といひ、その一つ／＼の形を「活用形」といひます。

動詞の活用形のうち、「鳴か」「降ら」のやうに「ない」の附く形を「第一形」「鳴き」「降り」のやうに「ます」の附く形を「第二形」「鳴く」「降る」のやうに文の終に用ひる形を「第三形」といひ、また「鳴け」「降れ」のやうに「ば」の附く形を「第四形」といひます。

(注意一) 第三形は各動詞を代表させる形です。従つてどの辭書にも、この形で動詞を出してあります。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |                                |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|--------------------------------|
| ワ | ラ | ヤ | マ | ハ | ナ | タ | サ | カ | ア | ア<br>段イ<br>段ウ<br>段エ<br>段オ<br>段 |
| 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 |                                |
| わ | ら | や | ま | は | な | た | さ | か | あ |                                |
| ゐ | り | い | み | ひ | に | ち | し | き | い |                                |
| う | る | ゆ | む | ふ | ぬ | つ | す | く | う |                                |
| ゑ | れ | え | め | へ | ね | て | せ | け | え |                                |
| を | ろ | よ | も | ほ | の | と | そ | こ | お |                                |

  

|  |  |   |   |  |  |   |   |   |                                |  |
|--|--|---|---|--|--|---|---|---|--------------------------------|--|
|  |  | バ | バ |  |  | ダ | ザ | ガ |                                |  |
|  |  | 行 | 行 |  |  | 行 | 行 | 行 |                                |  |
|  |  | ば | ば |  |  | だ | ざ | が | ア<br>段イ<br>段ウ<br>段エ<br>段オ<br>段 |  |
|  |  | び | び |  |  | ぢ | じ | ぎ |                                |  |
|  |  | ぶ | ぶ |  |  | づ | ず | ぐ |                                |  |
|  |  | べ | べ |  |  | で | ぜ | げ |                                |  |
|  |  | ぼ | ぼ |  |  | ど | ぞ | ご |                                |  |

  

(注意二) 動詞の活用を委し  
 には、まづ音圖表をよく知  
 かなければなりません。  
 こゝに記しておきます。

(注意二) 動詞の活用を委しく知るには、まづ音圖表をよく知つておかなければなりません。よつてこゝに記しておきます。

音圖表の縦の各列を「行」といひ、ア行カ行など、横の各列を「段」といひます（ア段・イ段など）。

二〇 動詞「鳴く」「降る」は「一五」で述べた通り、「ない」が附くと「鳴かない」「降らない」となります。その「か」「ら」はア段音です。このやうに、「ない」が附くと語の末がア段音になる動詞の活用を「四段活用」といひます。

四段活用は

| 第一形      | 第二形      | 第三形 | 第四形     |
|----------|----------|-----|---------|
| 鳴か<br>ない | 鳴き<br>ます | 鳴く  | 鳴け<br>ば |
| 降り<br>ない | 降り<br>ます | 降る  | 降れ<br>ば |

の「か」「き」「く」「け」「ら」「り」「る」「れ」のやうに、語の末が「アイウエ」の四段の音に變ります。

次の動詞はみな四段活用です。

|        |    |    |    |
|--------|----|----|----|
| 脱ぐ（脱が） | 脱ぎ | 脱ぐ | 脱げ |
| 話す（話さ） | 話し | 話す | 話せ |
| 立つ（立た） | 立ち | 立つ | 立て |
| 買う（買は） | 買ひ | 買う | 買へ |
| 飛ぶ（飛ば） | 飛び | 飛ぶ | 飛べ |
| 飲む（飲ま） | 飲み | 飲む | 飲め |
| 乗る（乗ら） | 乗り | 乗る | 乗れ |

（注意）右の「買う」のやうに、語の末が「は」「ひ」「ふ」「へ」となる動詞は、次のかぎの中のやうに、それぞれ「ワ」「イ」「ウ」「エ」と發音されます。

|           |           |
|-----------|-----------|
| 買は「カワ」ない。 | 買ひ「カイ」ます。 |
| 本を買ふ「カウ」  | 本を買へ「カエ」ば |

練習六 次の動詞の四つの形をおあげなさい。

書く 騒ぐ 喜ぶ 歸る 行く 打つ

言ふ 讀む 押す 笑ふ 泳ぐ 嘯む  
吹く 漕ぐ 出す 勝つ 歌ふ 運ぶ  
沈む 取る 賣る

一段活用

〔二二〕動詞「起きる」「食べる」の各四つの形は、次の通りです。

第一形 弟は まだ 起きない。(起きる、ない)

第二形 弟は 六時に 起きます。(起きる、ます)

第三形 私は 五時に 起きます。

第四形 弟が 起きれば 妹も 起きるでせう。(起きる、ば)

第一形 弟は まだ 夕飯を 食べない。(食べる、ない)

第二形 私は 七時に 夕飯を 食べます。(食べる、ます)

第三形 私たちは 六時に 朝飯を 食べます。

第四形 あなたが 食べれば 私も 食べませう。(食べる、ば)

右の例で分る通り、動詞「起きる」「食べる」は「ない」を附けると、「起き」「食べ」となります。その「き」「べ」はイ段音・エ段音です。このやうに「ない」が附くと、語の末がイ段音・エ段音になる動詞の活用を「一段活用」といひます。

一段活用は

| 第一形      | 第二形      | 第三形 | 第四形      |
|----------|----------|-----|----------|
| 起き<br>ない | 起き<br>ます | 起きる | 起き<br>れば |
| 食べ<br>ない | 食べ<br>ます | 食べる | 食べ<br>れば |

のやうに、それぞれ第一形と第二形とは同形で、第三形はそれに「る」、第四形は「れ」の附いたものです。

次の動詞も一段活用です。

落ちる(落ち 落ち 落ちる 落ちれ)  
閉ぢる(閉ぢ 閉ぢ 閉ぢる 閉ぢれ)

見る (見 見 見る 見れ)  
 燃える (燃え 燃え 燃える 燃えれ)  
 教へる (教へ 教へ 教へる 教へれ)  
 出る (出 出 出る 出れ)

〔二二〕 一段活用のうち、起きる、落ちる、閉ぢる、見るの第一形は、起き、落ち、閉ぢ、見であつて、イ段音で終り、また、食べる、燃える、教へる、出るの第一形は、食、燃え、教へ、出であつて、エ段音で終ります。

上二段活用  
 下二段活用

「起きる」などのやうに、第一形がイ段音で終る活用を、上一段活用といひ、食べるなどのやうに、第一形がエ段音で終る活用を、下一段活用といつて、區別することがあります。

練習七、次の動詞の四つの形をおあげなさい。

下りる 着る 延びる 逃げる 並べる 分ける 撫でる  
 数へる 忘れる 生きる 居る 別れる 寝る 始める  
 立てる 煮る 用ひる 比べる 過ぎる

變格活用

〔二三〕 動詞「来る」爲るの各四つの形は、次の通りです。

第一形 友達はまだこない。(くる、ない)  
 第二形 田中さんは毎日こゝにきます。(くる、ます)  
 第三形 私の弟も毎日こゝにくる。  
 第四形 弟がくれば、私は歸りませう。(くる、ば)  
 第一形 今日はまだ掃除をしない。(する、ない)  
 第二形 姉は毎日掃除をします。(する、ます)  
 第三形 妹もときどき掃除をする。  
 第四形 妹が掃除をすれば、姉が喜ぶでせう。(する、ば)

右のやうな活用を「變格活用」といひます。

即ちこれは

| 第一形     | 第二形     | 第三形      | 第四形      |
|---------|---------|----------|----------|
| こ<br>ない | き<br>ます | くる<br>する | くれ<br>すれ |

のやうに、前者の第一・第二形は「こ」「き」で、第三・第四形は「く」「れ」の附いたものであり、後者は第一・第二形は「し」で、第三・第四形は「す」に「る」「れ」の附いたものです。前者を「力行變格活用」(略稱「力行變」)といひ、後者を「サ行變格活用」(略稱「サ變」)といつて、區別することがあります。

カ變の動詞は「来る」「サ變の動詞は「爲る」だけですが、「爲る」は他の語と合して、一つの動詞を作ります。その時に「サ行音」に變るものがあります。

力行變格活用  
サ行變格活用

活用の種類

散歩する 勉強する 運動する  
察する 接する 略する  
信ずる 感ずる 命ずる 應ずる

〔二四〕 以上に述べた動詞の種類を簡単に示せば、次の通りです。

四段活用

アイ・ウ・エと活用する。

一段活用

上一段活用

イ・イル・イレと活用する。

下一段活用

エ・エル・エレと活用する。

變格活用

力行變格活用

コ・キ・クル・クレと活用する。

サ行變格活用

シ・スル・スレと活用する。

〔二五〕

(い) 私は 七時に 夕飯を 食<sup>○</sup>べる。

私も 毎朝 新聞を 讀<sup>○</sup>む。

(ろ) 私は 六時に 起<sup>○</sup>きる。

小鳥が 鳴<sup>○</sup>く。

右(い)の動詞「食べる」「讀む」は「夕飯」「新聞」のやうな、必ずその動作

他動詞

の對象を示す語が必要です。このやうな動詞を他動詞といひます。動詞の對象を示す語には、右の「朝飯を」「新聞を」のやうに「を」といふ語を附けるのが普通です。

次に右の例の「起さる」「鳴く」のやうに、動作の對象を示す語を必要としない動詞を「自動詞」といひます。

なほ次の動詞。印は他動詞です。

窓を しめる。

帽子を かぶる。

着物を きる。

畑に 野菜の 種子を 蒔く。

荷物を 車に 載せる。

面白い 話を 聞く。

友達に 電話を かける。

また次の動詞。印は自動詞です。

六時に 日が 出る。

ときどき 雨が 降る。

兄の 歸るのは 七時頃です。

毎日 飛行機が 飛ぶ。

庭に 池が ある。

中田は 運動場に ゐる。

練習八 次の動詞の活用の種類を言つてごらんなさい。

焼く 急ぐ 貸す 負ける 流れる

光る 吸ふ 出る 考へる 浴びる

汲む 禁ずる 刺す 殖える 見せる

来る 借りる 積む 死ぬ 旅行する

流す 踊る 思ふ 愛する 答へる 聞く

## 第二節 各活用形の主な用法

〔二六〕動詞の一つ一つの形には、それぞれの用法があります

こゝにその主な用法を述べませう。

「二七」第一形

第一形は既に述べた通り(一五)一九参照、「ない」を附けて打消とするほかに、次のやうに用ひます。

(私も新聞を 讀まう。ヨモオ四段)

(私も明日から 早く 起きよう。オキヨオ上二段)

(私は菓子を 食べよう。タベヨオ下一段)

(私は明日も こゝへ こよう。コヨオカ變)

(私も散歩を しよう。シヨオサ變)

右の「讀まう」「起きよう」「食べよう」「こよう」「しよう」のやうに、第一形には「う」「よう」が附いて、話手の意志を示します。

「う」は四段活用に付き、「よう」はその他の活用に附きます。

(注意一) 書き表す場合には、動詞を打消す爲に「ない」の代りに「ぬ」を用

ひることがあります。

この 鳥は 鳴かぬ。(鳴かない)

弟は まだ 起きぬ。(起きない)

今日は 散歩を せぬ。(しな)

右の最後の例のやうに「しな」の意味を「ぬ」で表す時は「し」が「せ」となります。

(注意二) 動詞の「ある」には助動詞「ない」も「ぬ」も附きません。「ある」の打消には、次のやうに「ない」といふ語を用ひます。

こゝには 何も ない。(何もあらぬとも何もあらぬともいひません。)

蛇には 足が ない。(足があらぬとも足があらぬともいひません。)

練習九 次の動詞に「う」「よう」を附けてごらん下さい。

行く 着る 見せる 出す 考へる 言ふ 脱ぐ 待つ 寝る  
進む 別れる 勉強する 見る 植ゑる ゐる 運ぶ 休む

〔二八〕 第二形

第二形は既に述べた通り(一六)(一九)参照、丁寧の意味を添へる爲に「ます」を附けるほかに、次のやうに用ひます。

(い) 昨日 中村君に 本を 貸した。(四段)

私も 昨日は 五時に 起きた。(上一段)

今朝は 六時に 朝飯を 食べた。(下一段)

昨日 きたのは 中村君です。(カ變)

私は 今朝 散歩を した。(サ變)

右の「貸した」「起きた」「食べた」「した」のやうに、第二形には「た」が附いて過去を表します。

(ろ) あの 本は 中村君に 貸して、こゝに ありません。(四段)

昨日も 五時に 起きて、本を 読みました。(上一段)

今朝 六時に 朝飯を 食べて、七時に うちを 出ました。

(下一段)

昨日も 中村君が こゝに きて、仕事を しました。(カ變)

昨晩は 散歩を して、それから 友達の うちへ 行きました。(サ變)

した。(サ變)

右の「貸して」「起きて」「食べて」「きて」「して」のやうに、言ひきれないで下に續けるには、第二形に「て」を附けます。  
練習十 次の動詞に「た」「て」を附けてごらん下さい。

出す 着る 投げる 命ずる 撫でる

聞える 倒れる 感ずる 鳴らす 見る

始める 旅行する 負ける 達する 動かす

〔二九〕 前二節で述べた通り、「た」「て」は動詞の第二形に附くのです。が、四段活用動詞に「た」「て」が附くと、次のやうな特別の形に變ります。之を「第五形」といひます。

(い) 第三形が「く」「ぐ」で終る動詞は、第二形の「き」「ぎ」が「い」に變り

ます。

(泣く) 泣きたて——泣いたて  
(咲く) 咲きたて——咲いたて  
(泳ぐ) 泳ぎたて——泳いだて  
(脱ぐ) 脱ぎたて——脱いだて

右のやうに「ぎ」「い」になると、下の「た」「て」は「だ」「で」となります。

(ろ) 第三形が「ぬ」「む」「ぶ」で終る動詞は、第二形の「に」「み」「び」「ん」に變ります。

(死ぬ) 死にたて——死んだて  
(讀む) 讀みたて——讀んだて  
(飲む) 飲みたて——飲んだて  
(飛ぶ) 飛びたて——飛んだて  
(呼ぶ) 呼びたて——呼んだて

右のやうに、この場合には下の「た」「て」は「だ」「で」となります。

(は) 第三形が「つ」「ふ」「る」で終る動詞は、第二形の「ち」「ひ」「り」が促音となります。

(立つ) 立ちたて——立つたて  
(勝つ) 勝ちたて——勝つたて  
(笑ふ) 笑ひたて——笑つたて  
(歌ふ) 歌ひたて——歌つたて  
(乗る) 乗りたて——乗つたて  
(有る) 有りたて——有つたて

(注意一) 「行く」は第三形が「く」で終りますが、「た」「て」が附くと第二形「き」が促音となります。

(行く) 行きたて——行つたて

(注意二) 四段活用でも、「貸す」「話す」「出す」などのやうに、第三形が「す」で終る動詞には「た」「て」はその第二形に附きます。

(貸す) 貸したて  
(話す) 話したて

(出す) 出した(て)

練習十一 次の動詞に「た」を附けてごらんなさい。

書く 漕ぐ 持つ 買ふ 休む 鳴る  
 打つ 焼く 運ぶ 噛む 折る 押す  
 洗ふ 騒ぐ 喜ぶ 光る 巻く 待つ  
 思ふ 消す 繋ぐ 踏む

(注意三) 「笑ふ」「歌ふ」「使ふ」などのやうに、第三形が「ふ」で終る動詞に「た」が附くと、第二形の「ひ」が「う」となることがあります。

(笑ふ) 笑ひた(て) — 笑うた(て)「ワロオタ(テ)」  
 (歌ふ) 歌ひた(て) — 歌うた(て)「ウトオタ(テ)」  
 (使ふ) 使ひた(て) — 使うた(て)「ツコオタ(テ)」

第三形の用法

〔三〇〕 第三形

第三形は既に述べた通り(一七)一九参照、文の終に用ひるほかに、次のやうに用ひます。

(い) 貸す 本(四段)

朝 起きる 時(上一段)

御飯を 食べる へや(下一段)

こゝへ くる 途中(カ變)

散歩を する 人(サ變)

右の例のやうに、第三形は名詞の上にあつて、之を修飾するに用ひます。

(ろ) 弟も 七時には 起きるだらう。「オキルダロオ(上一段)」

田中さんも 散歩を するでせう。「スルデシヨオ(サ變)」

私は 晝飯を 食べると、庭に 出ます。(下一段)

弟は 友達に 鉛筆は 貸すが、萬年筆は 貸しません。(四段)

ちぎに 田中が くるから、そこに 待つて おいでなさい。(カ變)

右の如く第三形は「だらう」「でせう」と「が」等を附けて用ひます。

(注意) 右の例の「だらう」「でせう」も推量の意味を表す語ですが、「でせ

## 第四形の用法

うは丁寧の意味があつて、普通の談話に用ひます。(六五の(2)、六六)参照

また、とは條件に「が」は前後照應しない場合に用ひ、からは理由原因を示すに用ひます。(七九の(ほ)、七〇の(は)、七一の(ろ)参照)

## 〔三一〕 第四形

第四形は既に述べた

鳴けば (四段)

起きれば (上一段)

食べれば (下一段)

くれば (カ變)

すれば (サ變)

のやうに「ば」を附けて假定に用ひます。(二八、一九参照)

練習十二 次の動詞に適當の名詞及び「ば」を附けてごらん下さい。

進む 別れる 勉強する 見る 言ふ

行く 着る 待つ 脱ぐ 禁ずる

出す 考へる 思ふ 見せる 歌ふ

飛ぶ 乗る 落ちる 休む 殖える

運ぶ 驚かす

## 命令のいひ方

## 〔三二〕 命令のいひ方

もつと ゆつくり 讀め。(讀む、四段)

明朝から もつと 早く 起きろ。(起きる、上一段)

窓を あけろ。(あける、下一段)

こゝへ こい。(来る、カ變)

お前も 掃除を しろ。(する、サ變)

動詞を以て命令を表すには、右の如く四段活用は第四形をそのまゝ用ひ、上一段・下一段・サ變は第一形に「ろ」を附け、カ變は第一形に「い」を附けます。但しこれ等は丁寧の意味がなく、談話では次のやうな丁寧な言ひ方をするのが普通です。

もつと ゆつくり お讀みなさい。(讀め)

明朝から もつと 早く お起きなさい。(起きろ)

窓を おあけなさい。(あける)

あなたも 掃除を おしなさい。(しる)

即ち動詞の第二形に「お・なさい」を附けます。但し、カ變の「こ」の場合には「おきなさい」といはないで、「お出でなさい」または「いらっしやい」といふ。

こへへお出でなさい。「いらつしやい」

練習十三 次の一印の動詞を、普通の命令の形と、丁寧な命令の形とに  
お直しなさい。

- (1) そこに立つ。
- (2) 二階から下へおろる。
- (3) もう一度よく考へる。
- (4) 私にもそれを見せる。
- (5) 十一時までには歸る。
- (6) 手紙を書く。

(7) 仕事を丁寧にする。

## 第六章 形容詞

### 第一節 第一種形容詞

鐵は 堅い。

富士山は 美しい。

今日は 海が おだやかだ。

あの 山道は 危険だ。

右の「堅い」「美しい」「おだやかだ」「危険だ」は、鐵・富士山・海・山道が「どんなであるか」を述べてゐます。この「堅い」「美しい」「おだやかだ」「危険だ」のやうに、事物の性質・有様を述べる語を「形容詞」といひます。形容詞は「い」「だ」で終ります。

第一種形容詞の活用

〔三四〕形容詞も動詞と同様に、用ひ方によつて形が變ります。之を形容詞の活用といひます。

形容詞の活用には第一種活用と第二種活用との二種あります。

〔三五〕第一種活用の形容詞は「寒い」を例として示せば、次のやうに變ります。

- 第一形 あ の 山 の 上 は 寒<sub>い</sub>からう。「サムカロオ」
- 第二形 あ の 山 の 上 は 寒<sub>く</sub>なる。
- 第三形 あ の 山 の 上 は 寒<sub>い</sub>。
- 第四形 若し 寒<sub>ければ</sub> シャツを 二枚 着ませう。
- 第五形 山 の 上 は 寒<sub>かった</sub>。

即ち語の末が「から、く、い、けれ、か」となります。之を表にして示すと次の通りです。

| 例 | 語 | 第一形                 | 第二形            | 第三形            | 第四形                 | 第五形                  |
|---|---|---------------------|----------------|----------------|---------------------|----------------------|
| 寒 | い | 寒 <sub>(う)</sub> から | 寒 <sub>く</sub> | 寒 <sub>い</sub> | 寒 <sub>(ば)</sub> けれ | 寒 <sub>(た)</sub> かった |

(一)印の假名は下に附く語を示したのです。以下の表も同様です。

次の形容詞も第一種活用です。

- 廣<sub>い</sub> 狭<sub>い</sub> 厚<sub>い</sub> 薄<sub>い</sub> 苦<sub>しい</sub> 嬉<sub>しい</sub>
- 古<sub>い</sub> 新<sub>しい</sub> 正<sub>しい</sub> 長<sub>い</sub> 短<sub>い</sub> 太<sub>い</sub>
- 細<sub>い</sub> 善<sub>い</sub> 悪<sub>い</sub> 赤<sub>い</sub> 白<sub>い</sub> 黒<sub>い</sub> 青<sub>い</sub>
- 暑<sub>い</sub> 涼<sub>しい</sub>

次に各活用形の主な用法を述べませう。

〔三六〕 山 の 上 は 寒<sub>い</sub>からう。「サムカロオ」(寒い、う)

公園の 花が 美<sub>い</sub>しからう。「ウツクシカロオ」(美しい、う)

第一形の用法

形容詞に推量の意味を添へるには、これに「う」といふ語を附けます。形容詞「寒い」「美しい」に「う」を附けると、右の例の「寒からう」「美しからう」のやうに「いがから」となります。

形容詞に「う」の附く形、即ち右の「寒から」「美しから」のやうな形を、形容詞の「第一形」といひます。  
なほ數例を挙げませう。

廣い、うー廣からう。

狭い、うー狭からう。

厚い、うー厚からう。

薄い、うー薄からう。

苦しい、うー苦しからう。

嬉しい、うー嬉しからう。

新しい、うー新しからう。

正しい、うー正しからう。

練習十四 次の形容詞に「う」を附けて「ごらんなさい」。

長い 短い 太い 細い 善い 悪い  
赤い 白い 黒い 青い 暑い 涼しい  
明るい 暗い 面白い 烈しい

(注意一) 右に挙げた「寒からう」「美しからう」のやうな言ひ方は、主として書き表す場合に用ひ、談話では「三八」のはで述べる「寒いだらう」「美しいだらう」及びその丁寧な言ひ方「寒いでせう」「美しいでせう」を用ひるのが普通です。

(注意二) 形容詞の第一形には、「う」が附く以外の用ひ方はありません。

〔三七〕

(ウ) あの 山の 上は 寒く ない。(寒い、ない)

この 花は あまり 美しく ない。(美しい、ない)

形容詞を打消すには、これに「ない」といふ語を附けます。形容詞「寒い」「美しい」に「ない」を附けると、右の「寒くない」「美しくない」のやうに、「いがく」になります。

形容詞に「ない」の附く形、即ち右の「寒く」「美しく」のやうな形を形容詞の「第二形」といひます。

なほ、次の例をごらんなさい。

廣い、ないー廣くない。

狭い、ないー狭くない。

厚い、ない—厚くない。

薄い、ない—薄くない。

苦しい、ない—苦しくない。

嬉しい、ない—嬉しくない。

新しい、ない—新しくない。

正しい、ない—正しくない。

(注意三) 打消を表すに、動詞では第一形を用ひますが、(一五二〇二七) 参照、形容詞では右の如く第二形を用ひます。

(注意四) 右の「寒くない」「美しくない」などを用ひる場合に、間に「は」を入れて、

寒くはない。美しくはない。

のやうにいふことが少くありません。しかし「寒く(は)ない」「美しく(は)ない」は丁寧な言ひ方ではありません。之を丁寧にするには、次のやうに「ない」の代りに「ありません」又は「ございません」を附けます。談話ではこの丁寧な形を用ひるのが普通です。

あの 山の 上は 寒く(は) ありません。—寒く(は) ございません。この 花は あまり 美しく(は) ありません。—美しく(は) ございません。

ざいません。

(ろ) 山の 上は 夜 寒く なる。(寒い、動詞)

庭の 花が 美しく 咲く。(美しい、動詞)

右の「寒く」は下の動詞「なる」を修飾し、「美しく」は「咲く」を修飾してゐます。このやうに、第二形は動詞の上に置いて、之を修飾するのに用ひます。

練習十五 練習十四の形容詞を、打消になさい。

練習十六 次の各組の語を續けて言つてごらんなさい。

狭い、なる。 厚い、する。 軽い、打つ。

大きい、見える。 新しい、造る。 黒い、寫る。

よい、遊ぶ。 烈しい、戦ふ。 早い、起きる。

嬉しい、思ふ。 かたい、結ぶ。 遅い、歸る。

面白い、話す。 長い、續く。 白い、光る。

【三八】

(い) あの 山の 上は 寒い。

この 花は 美しい。

右の形容詞「寒い」「美しい」は、文の終に用ひてあります。この「寒い」「美しい」のやうに、文の終止に用ひる形容詞の形を「第三形」といひます。第三形は、「い」で終ります。

(注意五) 第三形は、その形容詞を代表させる形です。従つて辭書ではこの形で第一種形容詞を出してあります。

(ろ) 寒い 冬。 美しい 花。 厚い 本。  
長い 鉛筆。 高い 山。 新しい 帽子。

右のやうに第三形は、名詞の上にあつて之を修飾するに用ひます。

(注意六) 右の場合、形容詞の下に「の」を附けて「寒い」の冬「美しい」の花などのやうにいふのは誤りです。

(は) あの 山の 上は 寒いだらう。(でせう)  
公園の 花は 美しいだらう。(でせう)

絲が あまり 細いと、切れませう。

この 紐は 太いが、あまり 丈夫では ありません。  
午後は 暑いから、私は うちに 居ます。

右のやうに第三形は、動詞の場合と同じく「だらう」「でせう」と「が」「から」等を附けて用ひます。(三〇)の(ろ)参照

練習十七 次の形容詞を終に用ひた簡単な文をお作りなさい。

暑い 長い 青い 忙しい 早い あかるい 古い をかしい

練習十八 練習十七の形容詞の下に適當の名詞をお附けなさい。

練習十九 次の形容詞に「だらう」「でせう」と「が」「から」の附いた簡単な文をお作りなさい。

多い 熱い つめたい 深い 浅い 苦しい 勇ましい

〔三九〕 もし 寒ければ、シャツを 二枚 着ませう。(寒いば)

花が 美しければ、私も 買ひませう。(美しいば)

形容詞を、條件を表すに用ひる爲に、これに「ば」といふ語を附

けることがあります。形容詞「寒い」「美しい」に「は」を附けると、右の例「寒ければ」「美しければ」のやうに、「寒い」「美しい」が「寒けれ」「美しけれ」となります。この「寒けれ」「美しけれ」のやうに「は」の附く形を「第四形」といひます。なほ次の例をごらん下さい。

廣いば―廣ければ。

狭いば―狭ければ。

厚いば―厚ければ。

薄いば―薄ければ。

苦しいば―苦しければ。

嬉しいば―嬉しければ。

(注意七) 第四形は「ば」が附く以外の用ひ方はありません。

練習二十 練習十七の形容詞に「ば」を附けてごらん下さい。

〔四〇〕 山の 上は 寒かった。(寒い、た)

公園の 花が 美しかった。(美しい、た)

形容詞に過去の意味を添へるには、これに「た」といふ語を附けます。形容詞「寒い」「美しい」に「た」を附けると、右の例「寒かった」「美

しかった」のやうに、「い」「が」「かつ」となります。この「寒かつ」「美しかつ」のやうに「た」の附く形を「第五形」といひます。なほ數例を、挙げませう。

廣い、た―廣かった。

狭い、た―狭かった。

厚い、た―厚かった。

薄い、た―薄かった。

苦しい、た―苦しかった。

嬉しい、た―嬉しかった。

(注意八) 動詞の第五形は四段活用にしがありませんが(二九參照)形容詞は總て第五形があります。

また動詞の第五形には「た」が附きますが、形容詞の第五形には「た」が附くだけです。

「て」は第一種形容詞には、次の如く第二形に附きます。

山の 上では 寒くて ふるへて ゐました。

あの 花は 赤くて 大きい。

練習二十一 次の形容詞に「た」を附けてごらん下さい。

熱い つめたい 黒い 暗い 新しい 勇ましい  
 強い 勇ましい 弱い 大きい 小さい 正しい

第二節 第二種形容詞

〔四一〕第二種活用の形容詞は「おだやかだ」を例として示せば、次のやうに變ります。

第一形 あ の 海は おだやかだらう。「オダヤカダロオ」おだやかだ、う

第二形 あ の 海は おだやかで ない。「おだやかだ、ない」海も 午後には おだやかに なるでせう。「おだやかだ、動詞」

第三形 あ の 海は おだやかだ。

第四形 海が おだやかならば、船で 行きませう。「おだやかだ、ば」

だ、ば

第五形 昨日は 海が おだやかだった。「おだやかだ、た」

即ち語の末が「だ」で「に、だ、な、なら、だ」となり、第二形第三形にはそれぞれ二つの形があります。之を表にして示すと、次の通りです。

| 例 語   | 第一形           | 第二形           | 第三形           | 第四形             | 第五形             |
|-------|---------------|---------------|---------------|-----------------|-----------------|
| おだやかだ | おだやか <u>ら</u> | おだやか <u>で</u> | おだやか <u>だ</u> | おだやか <u>な</u> ら | おだやか <u>た</u> つ |
| (う)   | おだやか <u>に</u> | おだやか <u>な</u> |               |                 | (た)             |

次の形容詞も第二種活用です。

静かだ 明かだ たひらだ 賑かだ  
 盛んだ 朗かだ 花やかだ はでだ  
 豊かだ 柔かだ きれいだ りっぱだ

第二種形容詞の活用

第一形の用法

|     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|
| 丁寧だ | 親切だ | 丈夫だ | 愉快だ |
| 不快だ | 危険だ | 豊富だ | 貧弱だ |
| 嚴重だ | 無事だ |     |     |

次に各活用形の主な用ひ方を述べませう。

〔四二〕 あゝの 海は おだやかだらう。オダヤカダロオ（おだやかだ、う）公園の 花も きれいだらう。キレエダロオ（きれいだ、う）

形容詞「おだやかだ」「きれいだ」に推量の意味を添へる爲に「う」を付けると、右の例の「おだやかだらう」「きれいだらう」のやうに「だ」「が」となります。

この「おだやかだら」「きれいだら」のやうな「う」の附く形を「第一形」といひます。

なほ數例を挙げませう。

|                |              |
|----------------|--------------|
| 静かだ、うー静かだらう。   | 明かだ、うー明かだらう。 |
| 賑かだ、うー賑かだらう。   | 盛んだ、うー盛んだらう。 |
| りっぱだ、うーりっぱだらう。 | 丁寧だ、うー丁寧だらう。 |

練習二十二 次の形容詞に「う」を附けてごらんない。

明かだ 花やかだ はでだ 柔かだ  
親切だ 丈夫だ 危険だ 豊富だ

〔注意一〕 第一形には「う」の附く以外の用ひ方はありません。

〔四三〕 (い) あゝの 海は おだやかで ない。(おだやかだ、ない)

この 花は あまり きれいで ない。(きれいだ、ない)

形容詞「おだやかだ」「きれいだ」を打消す爲に、これに「ない」を附けると、右の例の「おだやかでない」「きれいでない」のやうに「だ」「が」となります。

この「おだやかで」「きれいで」のやうに「ない」の附く形を「第二形」

第二形の用法

といひます。なほ次の例をごらん下さい。

静かだ、ない——静かでない。

明かだ、ない——明かでない。

賑かだ、ない——賑かでない。

盛んだ、ない——盛んでない。

りっぱだ、ない——りっぱでない。

丁寧だ、ない——丁寧でない。

(注意二) 右の「おだやかでない」「きれいでない」などを用ひる場合には、

次の如く「ない」の上には「は」を入れるのが普通です。

おだやかではない。きれいではない。

(注意三) 右の「おだやかではない」「きれいではない」を丁寧にいふには、

次のやうに「ない」の代りに「ありません」又は「ございません」を用ひます。さうして談話ではこの丁寧な形を用ひるのが普通です。

おだやかではありません。——おだやかではございません。

きれいでありません。——きれいでではございません。

(ろ) 海も 午後には おだやかに なるでせう。(おだやかだ、動詞)

庭の 花が きれいに 咲く。(きれいだ、動詞)

形容詞「おだやかだ」「きれいだ」を右の例のやうに下の動詞(なる、咲く)を修飾するに用ひると「だ」になります。なほ次の例をごらん下さい。

静かだ、歩く——静かに歩く。

明かだ、する——明かにする。

親切だ、教へる——親切に教へる。

愉快だ、話す——愉快に話す。

無事だ、暮す——無事に暮す。

(注意四) 第一種活用は、下に「ない」の附く形と、下の動詞を修飾する時の形とは同形ですが(三八参照)第二種活用では右の如くその形が違います。

練習二十三 次の形容詞を打消になさい。

賑かだ 花やかだ はでだ 柔かだ。

丈夫だ 愉快だ 危険だ 無事だ。  
安全だ 有名だ。

練習二十四 次の(一)の中に適當の音を補つて、下へ續けて言つてごらんなさい。

- (1) 穩か( )話す。
- (2) 火が盛ん( )燃える。
- (3) 丁寧( )お辭儀した。
- (4) ひよこが丈夫( )育ちました。
- (5) 本を粗末( )するな。
- (6) 朗か( )笑ふ。
- (7) 若い時ははなやか( )暮した。

第三形の用法

〔四四〕

(い) あ の 海 は おだやかだ。

公園の 花が きれいだ。

右の「おだやかだ」「きれいだ」は文の終に用ひてあります。こ

の「おだやかだ」「きれいだ」のやうに、文の終止に用ひる形を「第三形」といひます。

(ろ) 海が おだやかだと、泳ぎたいがな。

この 花は きれいだが、葉は きれいで ない。

町が たいへん 賑かだから、行つて みませう。

右の如く「だ」で終る第三形は、「と」「が」「から」等を附けて、下に言ひ續けるのに用ひます。(三〇)の(ろ)、「三八」の(は)参照

〔注意五〕 第一種活用は「寒いだらう」「美しいだらう」のやうに、第三形に「だらう」を附けて推量を表しますが、第二種活用の第三形には「だらう」は附かず、推量を表すには第一形に「う」を附けて「おだやかだらう」「きれいだらう」といひます。

(は) おだやかな 海。      きれいな 花。      賑かな 町。

盛んな 會。      静かな へや。      愉快な 話。

おだやかだ。」「きれいだ」等が名詞の上にあつて、之を修飾す

る時は、右の例のやうに「だ」が「な」となります。

(注意六) 右の場合に、形容詞の下に「の」を附けて、「おだやかなの海」きれいな花などのやうにいふことはありません。

(注意七) 動詞も形容詞第一種活用も、文を終止する形と、下にある名詞を修飾する時の形とは同じですが、形容詞第二種活用では右のやうに、その形が違ひます。

練習二十五 次の形容詞を終に用ゐた簡単な文をお作りなさい。

明かだ 立派だ 朗かだ 花やかだ 有名だ

丁寧だ 親切だ 僅かだ。

練習二十六 練習二十五の形容詞の下に、適當な名詞をお付けなさい。

練習二十七 次の形容詞の下に、「と」「か」「から」を附けて、簡単な文をお作りなさい。

静かだ

愉快だ 危険だ 盛んだ 丈夫だ りっぱだ 不愉快だ

海が

〔四五〕 海が おだやかならば、船で 行きます。 (おだやかならば)

第四形の用法

花が きれいならば、買つて お出でなさい。 (きれいならば)

「おだやかだ」「きれいだ」を假定する爲に、これに「ば」を附けると、右の例の「おだやかならば」「きれいならば」のやうに、「だ」が「な」となります。この「おだやかなら」「きれいなら」のやうに、「ば」の附く形を「第四形」といひます。なほ數例を挙げませう。

静かだばー静かならば。

明かだばー明かならば。

朗かだばー朗かならば。

盛んだばー盛んならば。

りっぱだばーりっぱならば。

丁寧だばー丁寧ならば。

練習二十八 次の形容詞に「ば」を附けて、ごらんなさい。

柔かだ 花やかだ はでだ

危険だ 有名だ 無事だ 丈夫だ。

(注意八) 第四形は、「ば」が附く以外の用ひ方はありません。しかし談話では右の場合に「ば」を省いて

海が おだやかなら 船で 行きます。

## 第五形の用法

花が きれいなら 買つて お出でなさい。  
のやうにいふのが普通です。

## 〔四六〕

昨日は 海が おだやかだった。(おだやかだた)  
公園の 花が たいへん きれいだった。(きれいだた)

「おだやかだ」きれいだに過去の意味を添へる爲に、これに「た」を付けると、右の例の「おだやかだった」きれいだったのやうに、「だ」が「だつ」となります。この「おだやかだつ」きれいだつ」のやうに、「た」に附く形を「第五形」といひます。なほ次の例をごらん下さい。

静かだ、たー静かだった。

明かだ、たー明かだった。

朗かだ、たー朗かだった。

盛んだ、たー盛んだった。

りっぱだ、たーりっぱだった。

丁寧だ、たー丁寧だった。

〔注意九〕 第二種形容詞も、第一種形容詞と同じく、その第五形には「た」が附くだけです。

また第一種形容詞の第二形には「て」が附きますが〔四〇〕の〔注意八〕参照、第二種形容詞には「て」は附きません。

練習二十九 練習二十八の形容詞に「た」を附けてごらん下さい。

## 第二種形容詞の丁寧な形

## 〔四七〕 第二種形容詞の丁寧な形

第二種形容詞の第一形、第三形、及び第五形には、丁寧の意味を含む特別の形があつて、次のやうに用ひます。

あの 海は おだやかでせう。『オダヤカデシヨオ』(おだやかだらう)

あの 海は おだやかです。―(おだやかだ)

あの 海は おだやかでした。―(おだやかだった)

即ち「おだやかでせう」「おだやかです」「おだやかでした」は、それぞれ「おだやかだらう」「おだやかだ」「おだやかだった」を丁寧に言つたのであつて、談話には普通これを用ひます。

練習三十 次の一つくを丁寧な形になさい。

| 普通<br>の形      | 第一形           | 第三形    | 第五形           |
|---------------|---------------|--------|---------------|
| おたやかだら<br>(う) | おたやかだ<br>(う)  | おたやかだ  | おたやかだつ<br>(た) |
| 丁寧<br>の形      | おたやかでせ<br>(う) | おたやかです | おたやかでし<br>(た) |

賑かだらう 賑かだ 賑かだった  
親切だらう 親切だ 親切だった  
きれいだらう きれいだ きれいだった  
盛んだらう 盛んだ 盛んだった  
りっぱだらう りっぱだ りっぱだった  
静かだらう 静かだ 静かだった  
丈夫だらう 丈夫だ 丈夫だった  
明かだらう 明かだ 明かだった  
無事だらう 無事だ 無事だった

(注意十) 口語文では第二種形容詞の第一形第三形及び第五形に相當する次のやうな言ひ方を用ひるのが普通です。

あの海は おたやかであらう「オダヤカデアロオ」(おたやかだらう)

あの海は おたやかである「おたやかだ」  
あの海は おたやかであつた「おたやかだった」

即ち口語文では第二種形容詞の第二形「で」に動詞あるを附けて用ひるのです。

| 第一形             | 第三形      | 第五形             |
|-----------------|----------|-----------------|
| おたやかだら<br>(う)   | おたやかだ    | おたやかだつ<br>(た)   |
| おたやかで、あら<br>(う) | おたやかで、ある | おたやかで、あつ<br>(た) |

# 第七章 副詞

## 〔四八〕 ゆっくり 読む。

今日は 波が 少し 高い。  
公園の 花は 大變 きれいです。

右の「ゆっくり」は動詞「読む」を修飾し、「少し」「大變」はそれぞれ形容詞「高い」「きれいです」を修飾してゐます。この「ゆっくり」「少し」「大變」のやうに、動詞・形容詞を修飾する語を「副詞」といひます。  
次の語はみな副詞です。

しばらく ちよつと すぐ(に) ちき(に)  
たびたび ときどき たまに さつそく。  
大層 大變 よほど 少し もつと あまり(に) 最も。  
はつきり(と) ぼんやり(と) ゆっくり(と)  
にっこり(と) ひらり(と)。  
必ず きつと 決して 多分 若し たとへ  
まるで ちやうど。

## 〔四九〕

(一) 印の中の語は、省いても用ひます。

もつと ゆっくり お読みなさい。  
山の 寫眞は 少し ぼんやり とれました。  
先生が 大變 はつきり 教へて 下さいます。

右の副詞「もつと」「少し」「大變」は、それぞれ下にある他の副詞「ゆっくり」「ぼんやり」「はつきり」を修飾してゐます。このやうに副詞は、他の副詞を修飾することがあります。

## 〔五〇〕 あまり たくさん 食べるのは いけません。

右の副詞「あまり」は他の副詞「たくさん」を修飾し、また「たくさん」は動詞「食べる」を修飾してゐます。このやうに副詞は、修飾される語の直ぐ前にあるのが普通ですが、また次のやうに、修飾される語との間に他の語の入ることがあります。

ちよつと 此處へ お出でなさい。

叙述の副詞

「五一」

私も すぐ 學校へ 行きます。  
 しばらく あそこで 待つてゐませう。  
 中田君は ときどき 先生に ほめられます。  
 もし 雨が 降つたら、 歸つて お出でなさい。  
 私は 決して うそは 言ひません。  
 兄は 多分 七時頃に 歸るでせう。

右の副詞「もし」「決して」「多分」は、それぞれ假定の「降つたら」「打消の「言ひません」、推量の「歸るでせう」の意味を明かにしてゐます。さうしてこの「もし」「決して」「多分」は、それぞれ假定・打消・推量の場合にだけ用ひます。このやうに副詞の中には、一定の叙述に限つて用ひるものがあります  
 なほ次の例をごらん下さい

私も 必ず 行きます。(断言)

どうか 暫く 待つて 下さい。(願望)  
 まさか そんな 事は 無いでせう。(打消の推量)  
 あなたは なぜ 泣くのですか。(疑問)  
 たとへ 苦しくても、 苦しいと 言つては いけません。(假定)  
 二人は 仲が よくて、 まるで 兄弟のやうです。(比較)

(注意) 形容詞や名詞を、副詞のやうに動詞・形容詞を修飾するに用ひることがあります。

(い) 風が 強く 吹く。 軽く 打つ。

烈しく 戦ふ。 面白く 話す。

静かに 歩く。 丁寧に 教へる。

愉快に 話す。 急に 出かける。

右は形容詞の第二形を、副詞のやうに用ひた例です。  
 (ろ) 蜜柑を 三つ 食べた。  
 鉛筆を 五本 買ひました。

小鳥が 三羽 飛んで 行つた。

こゝに 本が 一冊 あります。

父は 昨晚、旅行から 歸りました。

私は 來月 マニラへ 行きます。

今夜 ゆつくり 話させう。

右は數詞や時を表す名詞を、副詞のやうに用ひた例です。

練習三十一 次の副詞に、修飾される言葉を附けてごらんさい。

ほんたうに たくさん やつぱり

少し すぐに きつと よほど

もう とうとう そろそろ

ちやうど おきに ちよつと

しばらく 全く なかなか

## 第八章 接續詞

### 接續詞

〔五二〕

昨日 山の 方には 雨が 降りました。しかし 風は 吹  
きませんでした。

さつき 中田さんが お出でに なりました。それから 櫻

井さんも お出でに なりました。

庭には 池も ありますし、また 運動場も あります。

右の「しかし」「それから」「または、前の語の意味を受けて、後に續  
けてゐます。このやうに前後を結びつける語を「接續詞」とい  
ひます。

### 接續詞の種類

〔五三〕 接續詞には、次のやうに大體四種類あります。

(い) あの町には 山が あります。それから 川も あります。

中村君は 野球が 好きで、そのうへ 庭球も 好きです。

右の「それから」「そのうへ」は、附け加へる意味の接續詞です。

この種のものには、なほ次のやうな語があります。

さうして そして また かつ なほ 及び 並に

(ろ) あれは 軍艦でせうか。 それとも 汽船でせうか。

答案は ベン または 万年筆で お書きなさい。

右の「それとも」または「のやうに」接續詞には選擇の意味のものがああります。この種の語には、なほ次のやうな語があります。

もしくは あるひは

(は) 誰も みな 喜びました。ところが 一人 喜ばないものが わました。

私は 中村君と 一緒に 歸らうと 思ひます。だが 中

村君は どうしても 歸らうと 言ひません。

風は かなり 強く 吹いて ゐます。けれども 波は

あまり 高くは ありません。

右の「ところが」だが「けれども」のやうに、接續詞には、前後の意味の順當でない場合に用ひるものがあります。この種の語には、なほ次のやうなものがああります。

しかし ですが が でも もっとも 但し

(に) 雨が 降りさうです。ですから 傘を 持つて 出ませう。

十一時頃 雨が 降り出しました。すると 弟が 急いで

歸つて 來ました。

あなたも 公園へ、お出でに なりますか。では 私も

一緒に 参りませう。

右の「ですから」と「では」のやうに、接續詞には、前後の意味の順當である場合に用ひるものがあります。この種のものには、なほ次のやうな語があります。

そこで それでは さうすると それなら

だから 随つて 因つて

練習三十二

(い) 次の文の( )のところに、適當な接續詞をお入れなさい。

(1) 雨がひどく降りました。( )私たちは濡れませんでした。

感動詞

- (2) うちには犬も猫も居ます。(一)兎も居ます。  
 (3) 明朝は早く起きなければなりません。(一)今夜は早く寝ませう。  
 (4) 卒業式には父(一)兄が参るはずで。  
 (5) あそこには川があります。(一)池もあります。  
 (ろ) 次の接續詞を用ひて、簡単な文を作つてごらんなさい。  
 そのうへ しかし だから または けれども

第九章 感動詞

〔五四〕

- (い) あ、飛行機が 飛んで ゐる。  
 あや、雲が 出て 來ました。  
 やあ、ひどい 雨ですね。  
 (ろ) もしもし、あなたは 中村さんですか。  
 おい、そゝで 何をして ゐるのか。

(は) 「あなたも 之を お讀みに なりましたか。」「はい、昨日 讀みました。」

「あの方は 中村さんですか。」「いいえ、さうでは ありません。田中さんです。」

右(い)の「あ」「おや」「やあ」は感動の情を表す語であり、(ろ)の「もしもし」「おい」は呼びかけの語です。また(は)の「はい」「いいえ」は應答に用ひる語です。このやうな語を「感動詞」といひます。

〔五五〕 感動詞は右の例のやうに、文の首にあるのが普通ですが、また次の例のやうに、それだけで、一つの文と同様になることがあります。

「また 雨が 降つて きましたよ。」「あやあや。」  
 「中村さんの 帽子は これでせうか。」「さあ。」  
 「あなたも 新しい 本を お買ひ になりましたか。」「いいえ。」

文と同様の感動詞

(注意) 感動の情を表す語には、右の外に例へば、

この 花は 大變 綺麗です。

中村さんは 上手に 歌ひました。

の「ね」のやうな語がありますが、これ等は感動詞ではありません。これ等の語は必ず他の語の下に附けて用ひますが感動詞は右に述べた通り、文の首に用ひることが出来ます。もつとも、ねは、次の如く用ひられて感動詞になることがあります。

ね、お母さん、あれは 何でせう。

## 第十章 助動詞

### 第一節 助動詞の活用

助動詞

〔五六〕

(い) この 鳥は 鳴く。  
(ろ) この 鳥は 鳴かない。

(は) この 鳥は 鳴きます。

右(い)の「鳴く」は、四段活用の動詞「鳴く」の第三形を文の終に用いたものですが、(ろ)の「鳴かない」は、「鳴く」の第一形に「ない」が附いて「鳴く」を打消したものであり、また(は)の「鳴きます」は、「鳴く」の第二形に「ます」が附いて「鳴く」に丁寧の意味を添へたものです。(一五・一六参照)。この「ない」「ます」のやうに、主に動詞の下に附いて一定の意味を加へる語を「助動詞」といひます。

〔五七〕

(い) この 鳥は 鳴きます。  
(ろ) この 鳥は 鳴きません。  
(は) この 鳥は さっき 鳴きました。

右(い)の「ます」は文の終に用いたものですが、(ろ)の「ません」は、打消の意味を表す爲に「ます」に助動詞「ん」を附けたものです。この場合「ます」は「ませ」となります。また(は)の「ました」は、過去の意味

を表す爲に「ます」に助動詞「た」を附けたもので、この場合には「ます」が「まし」となります。

「ます」が「ろ」(は)において「ませ」「まし」となるやうに、助動詞の大部分は、用ひ方によつて形が變ります。之を「活用」といふことは、動詞・形容詞の場合と同様です。

(注意) 右(ろ)は「の」「ません」「ました」「ん」「た」のやうに、助動詞は他の助動詞の下に附くことがあります。

〔五八〕 助動詞の活用には、動詞と同じもの、形容詞と同じもの、及び特殊なものがあります。以下主なる助動詞について、その活用を述べることにします。

第二節 「な」

〔五九〕 「ない」は動詞の第一形に附いて打消の意味を表す助動詞であつて、その活用は第一種形容詞と同様です。(三・五参照)

活用の種類

「な」

| 語  | 第一形        | 第二形 | 第三形 | 第四形         | 第五形        |
|----|------------|-----|-----|-------------|------------|
| ない | なから<br>(う) | なく  | ない  | なければ<br>(は) | なかつ<br>(た) |

右各形の用法も、大體第一種形容詞と同様です。(三六―四〇参照) 次に例を挙げませう。

小さい 弟も あまり 泣かなく なりました。(第二形)

雨は まだ 降らない。(第三形)

誰も ゐない 室。(第三形)

今日は 雨が 降らないでせう。(降らないだらう)(第三形)

誰も こないから、散歩を しよう。(第三形)

田中君が 歌はなければ、中村君が 歌ひませう。(第四形)

海には 船が 一艘も 見えなかつた。(第五形)

(注意一) 第一形の「なから」には、「う」が附いて、例へば「椅子が足りなからう」と心配したのやうになり、椅子の足りないことを推量する意味

を表しますが、併しこの言ひ方は殆ど用ひず、第三形に「でせう」「だらう」を附けた「足りないでせう」「だらう」を用ひます。

(注意二) 書き表す場合には、第三形の「ない」、第四形の「なければ」の代りに、それぞれ「ぬ」「ね」を用ひることがあります。(二七)の(注意一)参照)

櫻は 夏には 咲かぬ。  
(咲かない)

雨の 降らぬ 日。  
(降らない日)

注意せねば ならぬ。  
(注意しなければならぬ)

(注意三) 動詞の「ある」には、打消の助動詞「ない」も「ぬ」も附きません。「ある」の打消には形容詞の「ない」を用ひます。例へば

ここに 本は あらぬ。

本は ここに あらぬが、私の へやに あります。

とはいはないで、

ここに 本は ない。

本は ここには ないが、私の へやに あります。

といひます。(二七)の(注意二)参照)

練習三十三 次の各組の語を續けてごらん下さい。

- |                |                 |
|----------------|-----------------|
| (1) 書かない、た。    | (2) 見えない、する。    |
| (3) 知らない、ば。    | (4) 讀まない、た。     |
| (5) 行く、ない、でせう。 | (6) 流れる、ない、ば。   |
| (7) 来る、ない、なる。  | (8) ある、ない、人。    |
| (9) 買ふ、ない、でせう。 | (10) 勉強する、ない、た。 |

第三節 「ます」

「ます」

「六〇」「ます」は動詞の第二形に附いて、丁寧の意味を添へる助動詞であつて(一六)(二一)(二八)参照、次のやうに活用します。

| 語  | 第一形       | 第二形 | 第三形 | 第四形       |
|----|-----------|-----|-----|-----------|
| ます | ませ<br>(う) | まし  | ます  | ます<br>(ば) |

次に各形の用例を挙げます。

## 第一形の用法

(1) 此處に 本は ありません。(第一形)

(2) 私も 新聞を 読みませう。「マシヨオ」(第一形)

(3) 午後 雨が やみませう。「マシヨオ」(第一形)

右の如く第一形「ませ」には、(1)助動詞「ん」が附いて打消を表します。また助動詞「う」が附いて、(2)話手の意志を表し、(3)推量していふ意味を表します。

(注意一)「ます」には、打消の助動詞「ない」は附きません。

## 第二形の用法

(4) 私は 今朝 飛行機を 見ました。(第二形)

雨が 降りまして、みんなが 濡れました。(第二形)

右の如く第二形には、助動詞「た」を附けて過去の意味を表し、また「て」を附けて下へ言ひ續けるのに用ひます。

## 第三形の用法

(5) 私は ときどき 公園へ 行きます。(第三形)

(6) 兄は 繪を かきますが、私は かきません。(第三形)

(7) おき 暗く なりますから、うちへ 歸りませう。(第三形)

右の如く第三形は、(5)のやうに文の終に用ひ、また(6)(7)のやうに「が」「から」等に續けるのに用ひます。

(注意二)「ます」の第三形を名詞の前に用ひて、例へば

こちらへ 参ります。途中で、弟に 逢ひました。

のやうにいふことがあります。普通の談話では、このやうな場合には「ます」を附けないで、

こちらへ 参る。途中で……

のやうにいひます。

また推量の意味を表すのに、第三形に「でせう」を附けて、

午後 雨が やみますでせう。

のやうにもいひますが、(3)のやうに「やみませう」といふのが普通です。

(8) あなたが おいでに なりますれば、私も 一緒に 参ります。(第四形)

## 第四形の用法

午後 雨が 降りますれば、私はうちに をります。(第四形)

右の如く第四形は、ばを附けて假定するのに用ひます。

練習三十四 次の各組の語を續けてごらんさい。

- |                 |                |
|-----------------|----------------|
| (1) 乗ります、ん。     | (2) あります、う。    |
| (3) 買ふ、ます。      | (4) 來る、ます、が。   |
| (5) 寒くなる、ます、から。 | (6) 讀む、ます、ば。   |
| (7) 書く、ます、た。    | (8) 勉強する、ます、て。 |
| (9) 乗る、ます、ん。    | (10) 見る、ます、う。  |
| (11) 考へる、ます、た。  | (12) 植ゑる、ます、ば。 |

第四節 「れる」「られる」

「れる」  
「られる」

〔六一〕

(1) 人を 笑へば、人に 笑はれる。(第三形)

太郎は ときどき 先生に ほめられる。(第三形)

右の「笑はれる」は、四段活用の動詞「笑ふ」の第一形「笑は」に助動

詞「れる」の附いたものであり、ほめられるは、下一段活用の動詞「ほめる」の第一形「ほめ」に、助動詞「られる」の附いたものです。

このやうに「れる」「られる」は、動詞の第一形に附けて、他から動作を受ける意味を表すに用ひます。

「れる」は四段活用の第一形に付き、「られる」はその他の活用の第一形に附きます。

「れる」「られる」の活用は、次の如く下一段活用です。

| 語   | 第一形 | 第二形 | 第三形 | 第四形 |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| れる  | れ   | れ   | れる  | れれ  |
| られる | られ  | られ  | られる | られれ |

次に各形の用例を示します。

(2) 太郎は 笑はれない。次郎が 笑はれたのです。(第一形)  
今日は まだ 誰からも ほめられない。(第一形)

## 第二形の用法

右の如く第一形は、ないを附けて打消を表すに用ひます。

(3) 太郎は ときどき 人から 笑はれます。(第二形)

次郎は 友達からも ほめられます。(第二形)

國境では 荷物を 調べられます。(第二形)

(4) 太郎は 昨日も 笑はれた。(第二形)

昨夜 靴を 盗まれた。(第二形)

次郎も 昨日は 先生に ほめられた。(第二形)

(5) 太郎は 友達に 笑はれて、顔を 赤く しました。(第二形)

小さい 弟に ペンを 折られて、こまりました。(第二形)

次郎は 先生に ほめられて、大變 喜んで います。(第二形)

右の如く第二形は、下に「ます」「た」を附けていふに用ひます。

## 第三形の用法

(6) 世の 中には、笑はれる 人は 多いが、ほめられる 人は 少ない。(第三形)

馬に 手を かまれる ことも あります。(第三形)

荷物を 調べられる 處は、國境です。(第三形)

(7) 次郎は 今日も ほめられるでせう。(ほめられるだらう。)(第三形)

三形)

太郎は ときどき 友達から 笑はれるが、別に 氣に かけて ない。(第三形)

そんな 事を すると 人に 笑はれるから、おしなさい。

(第三形)

右の如く第三形は、下の名詞に続け(6)、また「でせう」「だらう」「か」から等を下に附けていふ(7)に用ひます。

なほ第三形は、文の終に用ひることがありますが、その例は既に(1)に挙げました。

(8) 人から 笑はれれば、はづかしく なるのは、誰も 同じで

す。(第四形)

人から ほめられれば、誰だつて 嬉しく 思ふでせう。(第四形)

右の如く第四形は、「ば」を附けて假定するのに用ひます。

(注意一) 以上は他動詞(二五参照)が受身になる例ですが、日本語に

## 第四形の用法

いては次のやうに、自動詞(二五参照)にも「れる」を附けて受身とすることが出来ます。

雨に 降<sup>ら</sup>れて 困りました。「降る」の第一形に「れる」の第二形の附いたもの」

あなたに 残つて ゐ<sup>ら</sup>れると、私も 歸る ことが 出来ません。「ゐる」の第一形に「れる」の第三形の附いたもの」  
子供に 泣<sup>か</sup>れると、私も 悲しく なります。「泣く」の第一形に「れる」の第三形の附いたもの」

練習三十五 次の各組の語を續けてごらん下さい。

- |              |              |
|--------------|--------------|
| (1) 焼く、れる。   | (2) 見る、られる。  |
| (3) 入れる、られる。 | (4) 投げる、られる。 |
| (5) 動かす、れる。  | (6) 着る、られる。  |
| (7) 飛ぶ、れる。   | (8) 忘れる、られる。 |
| (9) 進む、れる。   | (10) 出る、られる。 |

練習三十六 次の動詞に受身の「れる」を附けてごらん下さい。  
流す 考へる 見せる 急ぐ 来る

- |     |     |     |    |     |
|-----|-----|-----|----|-----|
| 借りる | 積む  | 食べる | 讀む | 泣く  |
| 歸る  | 出す  | 載せる | 聞く | 立つ  |
| 起きる | 閉ぢる | 逃げる | 買ふ | 用ひる |
| 育てる | 入れる | 乗る  |    |     |

(注意二)「れる」られるは、次のやうに可能の意味を表すにも用ひます。

今日は 私も 一緒に 行<sup>か</sup>れる。(行く、れる)

私は 一時間に 十五頁 讀<sup>ま</sup>れる。(讀む、れる)

弟も 五時までには 此處に ゐ<sup>ら</sup>れるでせう。(ゐる、られる)

聞かれれば 何時でも 答<sup>こ</sup>へられる。(答へる、られる)

なほ右第一・二例の「行かれる」「讀まれる」を行ける「讀める」といつても同じ意味になります。即ち「行く」「讀む」等の四段活用動詞の下二段活用になると、大抵可能の意味の加はつた動詞となります。次になほ數例を挙げませう。

- |           |           |
|-----------|-----------|
| (四段)(下一段) | (四段)(下一段) |
| 書く―書ける    | 泳ぐ―泳げる    |
| 出す―出せる    | 勝つ―勝てる    |

死ぬー死ねる

買ふー買へる

飛ぶー飛べる

休むー休める

歸るー歸れる

〔注意三〕「れる」「られる」は、また次の例のやうに、他を尊敬する意味を表すにも用ひます。

先生は 毎日 十時に やすま<sup>〇</sup>れる。「やすむ」の第一形「れる」の

第三形

中村さんも さう 言は<sup>〇</sup>れました。「言ふ」の第一形「れる」の第二形

田中さんも ときどき 映畫を 見<sup>〇</sup>られる。「見る」の第一形「ら

れる」の第三形

先生は 毎朝 六時に 起<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>られます。「起きる」の第一形「られ

る」の第二形

〔注意四〕「する」「に」「られる」が附くと「しられる」となりますが、普通には次の如く「される」といひます。

友達から 親切に され<sup>〇</sup>る。(受身、第三形)

先生は 夕方に 散歩され<sup>〇</sup>ます。(尊敬、第二形)

第五節 「せる」「させる」

「せる」「させる」

〔六二〕

(1) 弟に 片假名を 書<sup>〇</sup>かせ<sup>〇</sup>る。(第三形)  
六時には 子供たちに 夕飯を 食<sup>〇</sup>べ<sup>〇</sup>させ<sup>〇</sup>る。(第三形)

右の「書かせる」は、四段活用 of 動詞「書く」の第一形「書か」に、助動詞「せる」の附いたものであり、「食べさせる」は、下一段活用 of 動詞「食べる」の第一形「食べ」に、助動詞「させる」の附いたものです。

このやうに「せる」「させる」は、動詞の第一形に附けて、他に動作をさせる意味、または許容する意味を表すに用ひます  
「せる」「させる」の活用は、次の如く下一段活用です

| 語   | 第一形 | 第二形 | 第三形 | 第四形 |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| せる  | せ   | せ   | せる  | せれ  |
| させる | させ  | させ  | させる | させれ |

第一形の用法

「せる」は四段活用の第一形に付き、させるはその他の活用の第一形に附きます。

次に各形の用例を挙げます

- (2) 弟には まだ 平假名を 書かせない。(第一形)
- 食事時で なければ、御飯は 食べさせない。(第一形)
- (3) 来月から 弟に 平假名を 書かせよう。(第一形)
- 子供たちに すぐ 夕飯を 食べさせよう。(第一形)

右の如く第一形は、(2)「ない」を附けて打消を表し、また(3)助動詞「よう」「六七」参照を附けて、話手の意志を表すに用ひます。

第二形の用法

- (4) 私は 弟に 平假名を 書かせます。(第二形)
- 子供たちには 六時に 夕飯を 食べさせます。(第二形)
- (5) 私は 弟に 平假名を 書かせた。(第二形)
- 昨晩は 子供たちに 七時に 夕飯を 食べさせた。(第二形)
- (6) 弟には 平假名を 書かせて、妹には 片假名を 書かせま

した。(第二形)

子供たちには 六時に 夕飯を 食べさせて、大人は 七時に 食べます。(第二形)

右の如く第二形は「ます」「た」「て」を附けていふに用ひます。

第三形の用法

- (7) 私は 弟に 書かせる 文字を 選びました。(第三形)
- 子供たちに 食べさせる 菓子を 買ひませう。(第三形)
- (8) 中村さんは 太郎君に 平假名を 書かせるでせう。(書かせるだらう)(第三形)
- 五時に 夕飯を 食べさせると、少し 早過ぎませう。(第三形)
- 弟には 片假名は 書かせるが、平假名は まだ 書かせません。(第三形)
- 子供たちに 夕飯を 食べさせるから、呼んで お出でなさい。(第三形)

右の如く第三形は、(7)下の名詞に続け、また(8)下に「でせう」「だらう」と「が」「から」等を附けていふに用ひます。

第四形の用法

なほ第三形は、文の終に用ひることがありますが、その例は既に(1)に挙げました。

- (9) 太郎に 片假名を 書かせれば、上手に 書きます。(第四形)  
六時に 子供たちに 夕飯を 食べさせれば、その 後は 忙しくは ありません。(第四形)

右の如く第四形は、下に「は」を付けていふに用ひます。

〔注意〕「する」に「させる」を附けると「しさせる」となりますが、普通には次の如く、たと「させる」といひます。

妹に 室の 掃除を させる。(第三形)

弟に 平假名を 勉強させませう。(第二形)

練習三十七 次の各組の語を續けてごらんなさい。

- (1) 焼く、せる。  
(2) 入れる、させる。  
(3) 投げる、させる。  
(4) 進む、せる。  
(5) 見る、させる。  
(6) 来る、させる。

(7) 読む、せる。

(9) 泳ぐ、せる。

(8) 捨てる、させる。

(10) 出す、せる。

練習三十八 次の動詞に助動詞「せる」「させる」を附けてごらんなさい。

- 考へる 急ぐ 積む 泣く 歸る 立つ 運ぶ  
起きる 閉ぢる 買ふ 用ひる 育てる 作る  
はいる 乗る ゐる 飲む 光る 受ける

第六節 「た」

「た」

「六三」

今日は ゆつくり 休<sup>〇</sup>みたい。(第三形)  
私も 何か 食<sup>〇</sup>べたい。(第三形)

右の「休みたい」「食べたい」は、四段活用の動詞「休む」の第二形、下一段活用の動詞「食べる」の第二形に、助動詞「たい」の附いたものです。このやうに「たい」は動詞の第二形に附けて、希望する意味を表すに用ひます。その活用は第一種形容詞と同様です。

〔三〕五参照

| 語  | 第一形        | 第二形 | 第三形 | 第四形        | 第五形        |
|----|------------|-----|-----|------------|------------|
| たい | たから<br>(う) | たく  | たい  | たけれ<br>(ば) | たかつ<br>(た) |

右各形の用ひ方も、第一種形容詞と大體同じです。(三六—四〇参照) 次にその用例を示します。

私も 休みた<sup>く</sup> なら<sup>ま</sup>した。(第二形)  
 私は 休みた<sup>く</sup>は あり<sup>ま</sup>せん。(第二形)  
 私は 休みた<sup>く</sup> ない。(第二形)  
 休みたい 時<sup>は</sup>、休む<sup>が</sup> よい。(第三形)  
 子供たちも 休みたい<sup>で</sup>せう。(第三形)  
 私も 休みたい<sup>が</sup>、今日<sup>は</sup> 休み<sup>ま</sup>せん。(第三形)  
 私は 休みたい<sup>から</sup>、今日<sup>は</sup> うち<sup>に</sup>ゐ<sup>ま</sup>す。(第三形)  
 あなたも 休みた<sup>けれ</sup>ば お休みなさい。(第四形)

昨日は 私も 休みた<sup>かつ</sup>た。(第五形)

〔注意一〕第一形の「たから」には「う」が附いて、例へば「弟も休みたからう」のやうになり、弟の休みたいことを推量する意味を表しますが、談話ではこの言ひ方はあまり用ひず、第三形に「でせう」「だらう」を附けた「休みたいでせう」「だらう」を用ひるのが普通です。

〔注意二〕「本を買<sup>う</sup>」「お茶を飲<sup>む</sup>」のやうに「を」と共に用ひる動詞に「たい」が附くと「を」は「か」ともなります。

私は 本<sup>を</sup>「が」買<sup>ひ</sup>たい。

私も お茶<sup>を</sup>「が」飲<sup>み</sup>たい。

練習三十九 次の各組の語を續けてごらんなさい。

- |             |            |
|-------------|------------|
| (1) 書きたい。   | (2) 読みたい。  |
| (3) 見たい。    | (4) 食べたい。  |
| (5) 乗りたい。   | (6) 居たい。   |
| (7) 着るたい。   | (8) 行くたい。  |
| (9) 勉強するたい。 | (10) 帰るたい。 |

(11) 歌ふ、たい、ありません。

第七節「た」「だ」

「た」「だ」

〔六四〕 (1) もう 日が 暮<sup>○</sup>れた。(第三形)

昨晚は 九時まで 勉強<sup>○</sup>した。(第三形)

右の「暮れた」は、下一段活用の動詞「暮れる」の第二形「暮れ」に助動詞「た」が附いて、「暮れる」ことの完了した意味を表し、また「勉強した」は、サ變の動詞「勉強する」の第二形「勉強し」に助動詞「た」が附いて、「勉強する」に過去の意味を加へたものです。このやうに「た」は動詞に附けて、完了または過去の意味を表すに用ひます。「た」は右の如く動詞の第二形に附きますが、四段活用には第五形に附きます。この際、次の如く「だ」となることがあります。  
(二九) 参照

泳ぐ、た——泳いだ。  
脱ぐ、た——脱いだ。  
死ぬ、た——死んだ。  
飲む、た——飲んだ。  
飛ぶ、た——飛んだ。

(注意一) 四段活用でも「貸す」「出す」「動かす」などのやうに「す」で終る動詞には、「た」はその第二形に附いて、  
貸<sup>○</sup>した。出<sup>○</sup>した。動<sup>○</sup>かした。  
のやうにいひます。(二九)の(注意二)参照

「た」の活用は次の通りです。

| 語 | 第一形       | 第二形 | 第三形 | 第四形 |
|---|-----------|-----|-----|-----|
| た | たら<br>(う) | ○   | た   | たら  |

第二形の欄の○は、その活用形の無いことを示します。

## 第一形の用法

即ち第一形と第四形とは同じく「たら」で、第二形はありません。次に各形の用例を挙げませう。

(2) 月は もう 出たらう。「タロオ」第一形

昨日 山の 方に 雨が 降つたらう。「タロオ」第一形  
太郎も あの 本を 讀んだらう。「タロオ」第一形

右の如く第一形は、助動詞「う」を附けて、推量していふに用ひます。

(注意二) 右(2)のやうな場合に、談話では第三形に「でせう」「だらう」を附けて、

月は もう 出たでせう。「出ただらう」

雨が 降つたでせう。「降つただらう」

本を 讀んだでせう。「讀んだだらう」

のやうにいふのが普通です。

(3) 月の 出た 時に、私は 海岸に おました。「第三形」

雨の 降つた 山の 方から、雲が 飛んで 來た。「第三形」

## 第三形の用法

それは 太郎が 昨日 讀んだ 本です。「第三形」

(4) 月は 出たが、あまり 明るく ない。「第三形」

雨が 降つたから、木の 葉が ぬれてゐる。「第三形」

その 本は 讀んだから、あなたへ 上げませう。「第三形」

右の如く第三形は、(3) 下の名詞に續ける場合に用ひ、また(4)「が」「等」を下に附けていふに用ひます。

なほ第三形を文の終に用ひることは、(1)の例で明かであり、また「でせう」「だらう」を附けて用ひることは、(2)の(注意二)に述べた通りです。

## 第四形の用法

(5) 月が 出たらば、私に 知らせて 下さい。「第四形」

雨が 降つたらば、子供たちは 歸つて 來るでせう。「第四形」

本を 讀んだらば、私の 室へ お出でなさい。「第四形」

右の如く第四形は、「ば」を附けて假定していふに用ひます。

但し、談話では「ば」を略していふのが普通です。

(注意三) 第四形はまた次のやうに用ひることがあります。

昨日 海岸へ 行つたらば、中村君に 逢ひました。

急いで 歸つたらば、苦しく なつた。

右の「海岸へ行つたらば」は、中村君に逢つた場合を表し、急いで歸つたらばは、苦しくなつた原因を示してゐます。この場合にも談話では「ば」を附けないのが普通です。

練習四十 次の各組の語を續けてごらんなさい。

- |              |                |            |              |
|--------------|----------------|------------|--------------|
| (1) 流す、た。    | (2) 見る、た。      | (3) 流れる、た。 | (4) 来る、た。    |
| (5) 命ずる、た。   | (6) 書く、た。      | (7) 泳ぐ、た。  | (8) 打つ、た。    |
| (9) 買ふ、た。    | (10) 呼ぶ、た。     | (11) 踏む、た。 | (12) 乗る、た、人。 |
| (13) 歌ふ、た、ば。 | (14) 賣る、た、でせう。 |            |              |

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| (15) 有る、た、う。  | (16) 勉強する、た、が。  |
| (17) 見る、た、から。 | (18) ゐる、た、ば。    |
| (19) 讀む、た、新聞。 | (20) 倒れる、た、だらう。 |

第八節 「だ」「です」

「だ」

〔六五〕

(1) あれは 富士山だ。(第三形)

會場は 此處だ。(第三形)

右の「富士山だ」「此處だ」は、名詞「富士山」「代名詞「此處」に、助動詞「だ」が附いて、「あれは何であるか」「會場は何處であるか」を述べてゐます。このやうに「だ」は名詞・代名詞に附いて、之を述語とする助詞です。

| 語 | 第一形       | 第二形 | 第三形 | 第四形 | 第五形       |
|---|-----------|-----|-----|-----|-----------|
| だ | だら<br>(う) | で   | だ   | なら  | だつ<br>(た) |

## 第一形の用法

「だ」の活用は右の通りです。  
 即ち第二種形容詞の活用(四一)参照に似てゐますが、第二形・第三形に違ふところがあります。次に各形の主な用ひ方を述べませう。

(2) あれは 富士山だらう。「ダロオ」第一形  
 会場は 此處だらう。「ダロオ」第一形

右の如く第一形は、助動詞「う」を附けて、推量していふに用ひます。

右の「だらう」は一語のやうになつて、名詞・代名詞の外に、動詞・形容詞・助動詞の第三形にも附いて、推量の意を表します。(三三〇)のろ「三八」のは「五九」「六一」「六二」「六三」「六四」の(注意二)参照

机は 室の 中に あるだらう。(動詞に)  
 この 本は 面白いだらう。(第一種形容詞に)

今日も 雨が 降らないだらう。(助動詞に)

太郎は 今日も また ぼめられるだらう。(同)

次郎も 一緒に 行きたいだらう。(同)

會は もう 終つただらう。(同)

(注意一)「だらう」を丁寧には「でせう」といひます。(六六参照)

(3) あれは 富士山では「ない」。(第二形)

会場は 此處では「ない」。(第二形)

右の如く第二形は、「ない」を附けて打消を表すに用ひます。  
 この場合「で」の下に「は」を附けるのが普通です。

(注意二) 右の「で、ない」を丁寧にいふ時は、次の如く「で、ありません」で、ございませんを用ひます。

あれは 富士山では「ありません」。(「ございません」)

会場は 此處では「ありません」。(「ございません」)

(4) あれは 富士山で、一番 美しい 山です。(第二形)

## 第二形の用法

第三形の用法

會場は 此處で、控所は あちらに あります。(第二形)  
右(4)の例のやうに第二形は、言ひきらないで、下に續けるのに用ひます。

(5)あれは 富士山だが、今日は ぼんやり 見える。(第三形)  
會場は 此處だから、おはいりなさい。(第三形)

右の如く第三形は、「か」から等を附けていふに用ひます。  
なほ第三形を文の終に用ひることは、(1)の例で明かですから、こゝには略します。

第四形の用法

(6)あれが 富士山ならば、もつと よく 見ませう。(第四形)  
會場が 此處ならば、すぐに はいりませう。(第四形)

右の如く第四形は、「ば」を附けて假定していふに用ひます。  
但し、談話ではこの場合、「ば」を附けないのが普通です。

第五形の用法

(7)さつき 見えたのは 富士山だった。(第五形)  
先月の 會場は 此處だった。(第五形)

「だ」の丁寧な形

右の如く第五形は、助動詞「た」を附けて過去を表すに用ひます。  
「六六」「だ」の第一形第三形及び第五形には、丁寧の意味を含む特別の形があつて、次のやうに用ひます。

あれは 富士山でせう。「デシヨオ」(富士山だらう。第一形)  
會場は 此處でせう。「デシヨオ」(此處だらう。第一形)  
あれは 富士山です。「富士山だ。第三形」  
會場は 此處です。(此處だ。第三形)  
あれは 富士山でした。「富士山だった。第五形」  
會場は 此處でした。(此處だった。第五形)

| 普通の形 | 第一形   | 第三形 | 第五形   |
|------|-------|-----|-------|
|      | だ(う)  | だ   | だつ(た) |
| 丁寧の形 | でせ(う) | です  | でし(た) |

右の丁寧な形は、談話に多く用ひます。

(注意一) 口語文には、右の第一形、第三形及び第五形に相當する次のやうな言ひ方があります。

あれは 富士山であらう。『デアロオ』富士山だらう。第一形  
 あれは 富士山である。『富士山だ。』第三形  
 あれは 富士山であつた。『富士山だつた。』第五形  
 即ち、だの第二形で、四段活用 of 動詞あるを附けて用ひるのです。  
 之を表にして示すと、次の通りになります。

| 第一形        | 第三形 | 第五形        |
|------------|-----|------------|
| だ<br>(う)   | だ   | だっ<br>(た)  |
| であら<br>(う) | である | であつ<br>(た) |

(注意二) 右の「である」を丁寧にいふ爲に、講演などでは次の如く「ます」を附けて「であります」とすることがあります。

あれは 富士山であります。

けれども談話では普通この言ひ方を用ひず「あれは富士山です。」といひ、一層丁寧の意を表すには、次の如く「でございます」を用ひます。

あれは 富士山でございます。

練習四十一 次の各組の語を續けてごらん下さい。

- (1) これは中村の帽子だ、う。
- (2) これは中村の帽子だ、た。
- (3) 中村の帽子はこれです、た。
- (4) あれは田中の帽子です、た。
- (5) 面白い本だ、ば、買ひませう。
- (6) それは面白い本だ、ない。
- (7) これは私の本だ、ありません。
- (8) あれは何だ、う。
- (9) あれは雲です、う。

(10) 昨日歌つたのはどなたでしたか。  
練習四十二 次の文に「でせう」「だらう」を用ひて推量の意味をお加へな  
はらう。

- (1) 級長は中村君です。
- (2) 太郎のかいた繪はこれだ。
- (3) 午後雨が降る。
- (4) 中村君もおきに來る。
- (5) 山の上は寒い。
- (6) 中村君はうちにゐない。
- (7) 太郎も行きたい。

第九節 「う」「よう」

「う」「よう」

〔六七〕「う」「よう」は、意志や推量を表すに用ひる助動詞であつて語  
形の變化なく次のやうに用ひます。

- (1) 私は 新聞を 讀<sup>ま</sup>う。「ヨモオ」  
私も 明日から 早く起<sup>き</sup>よう。「オキヨオ」  
私も 散歩をし<sup>し</sup>よう。「シヨオ」  
私は お茶を 飲<sup>み</sup>ませう。「マシヨオ」

右の如く「う」「よう」は、話手の動作を表す動詞に附いて、話手の  
意志を表します。(二七参照)

- (2) 外は 暗<sup>く</sup>からう。「クラカロオ」  
そんな 事も あらう。「アロオ」  
庭には 誰か ゐよう。「イヨオ」  
午後には 晴<sup>れ</sup>よう。「バレヨオ」

右の如く「う」「よう」は、話手が他を推量していふに用ひます。

(注意) 談話では右の場合です。「だ」の第一形に「う」の附いた「でせう」「だら  
う」を用ひるのが普通です。(六六参照)  
外は 暗<sup>い</sup>でせう。「だらう」

そんな 事も あるでせう。〔だらう〕  
 庭には 誰か ゐるでせう。〔だらう〕  
 午後には 晴れるでせう。〔だらう〕

「う」ようは、文の終に用ひるのが普通ですが、また次のやうに、下に「が」から等を附けて、言ひ續けるのに用ひます。

(3) 少しは 苦しからうが、苦しいだらうが、がまんなさい。

海は静かだらうから、船で行きませう。

午後には 晴れようから、晴れるだらうから、待つて 見よう。

「う」ようは動詞・形容詞の第一形に付き、「う」の附く語には「よう」は付きません。即ち「う」は動詞の四段活用と形容詞との第一形に付き、「よう」はその他の活用の第一形に附きます。

|     |          |    |            |
|-----|----------|----|------------|
| 讀ま  | (四段、讀む)  | 見  | (上一、見る)    |
| 廣から | (形容、廣い)  | う  | 受け(下一、受ける) |
| 静か  | だら形容、静かだ | こ  | (カ變、くる)    |
|     |          | よう |            |

し (サ變、する)

「う」はまた助動詞「ます」「たい」「た」「だ」の第一形に付き、「よう」は「れる」「られる」「せる」「させる」の第一形に附きます。

|       |      |      |       |
|-------|------|------|-------|
| 歌ひませ  | (ます) | 笑はれ  | (れる)  |
| 歌ひたから | (たい) | ほめられ | (られる) |
| 歌つたら  | (た)  | 讀ませ  | (せる)  |
| 學校だら  | (だ)  | 捨てさせ | (させる) |
|       |      | よう   |       |

練習四十三 次の各組の語を續けてごらんなさい。

- (1) あそこには私が行く、う。
- (2) 荷物は私が持ちます、う。
- (3) 來月旅行をする、よう、と思ひます。
- (4) 私は外へ出る、よう、と思つて、立上りました。
- (5) それがよい、う。
- (6) その箱は丈夫だ、う。

- (7) 友達が待つてゐる、ようから、私はすぐに出かけます。
- (8) 太郎も出かける、よう、としてゐます。

第十一章 助詞

助詞

〔六八〕

美しい 花が 咲いて ゐます。

弟は 今朝 五時に 起きて 本を 読みました。

右の「か」は「は」に及び、をのやうに、他の語の下に附いて、語と語との關係を示し、又は一定の意味を添へる語を「助詞」といひます。

助詞は必ず他の語の下に附けて用ひます。また語に活用がありません。

次に助詞の主なものについて述べませう。

〔六九〕

「か」

「か」には大體三つの用ひ方があります。

(一) それは 何ですか。

本は どこに ありますか。

これは 田中さんの 帽子でせうか。

右の如く「か」は疑問を表すに用ひます。

(二) 隣の 室に 誰か ゐるやうです。

弟は 何處かへ 遊びに 行きました。

私も いつか 東京へ 行きたいと 思ひます。

右の如く「か」は疑問の語に附けて、不定の意を表すに用ひます。

(三) 畑には 父が 兄が をります。

兄は 毎日 五時か 五時半に 起きます。

紅茶か コーヒーを 下さい。

右の如く「か」は語を並列して、選擇する意味を表すのに用ひ

ます。この場合に次の如く、並列した終の語にも「か」を附けることがあります。

机の上には 本が 五冊か 六冊か ありました。

(注意) (い)の「か」は、また次のやうに用ひることがあります。

こんな 時に、遊んで ゐられるものか。

そんな ことが 言へるものですか。

右の「ゐられるものか」「言へるものですか」は、「ゐられる」「言へる」の打消、即ち「ゐられない」「言へない」の意味を表します。この場合「か」は「もの」のものですに附くのが普通です。

「が」

〔七〇〕「が」 附「けれども」「けれど」

「が」には次のやうな用ひ方があります。

(い) 日が 出ました。

飛行機が 飛んで 來ました。

今度は 私が 歌ひませう。

右の如く「が」は主語を表します

(ろ) 私は お茶が 飲みたい。

あなたは 繪本が ほしいのですか。

僕も 繪が 好きだ。

弟は 酒が 嫌ひです。

右の如く「が」は望み、好み、及びその反對の語に對して、その對象となる事物を示すに用ひます。

「が」「けれども」

(は) (1) 中村は 本は 買ふが(けれども)、あまり 讀まない。

風が ないが(けれども)、波が 高い。

空に 雲が あつたが(けれども)、雨は 降らなかつた。

(2) 私は 繪が 好きですが、弟も 好きです。

中村は 私の 友達ですが、なか／＼ よい 人です。

その 花は、色も 美しいが、また 形も 大變 いい。

右の如く「が」は動詞・形容詞・助動詞の第三形に附けて、前後を

「から」

結びつけるのに用ひます。さうして(1)のやうに前後の意味の照應しない場合には「が」の代りに「けれども」又は「けれど」を用ひることがあります。

「七一」「から」まで 附「ので」

(い) 今朝 八時から 勉強を 始めました。

昨晩は 九時まで 勉強しました。

右の如く「から」は起點を表し、までは到達する點を表します。この「から」までを、次のやうに同時に用ひて、範圍を明かに示すことがあります。

「から……まで」

昨日は 第五頁から 第十頁まで 讀みました。

日本では 三月から 五月までが 春で、六月から 八月までが 夏です。

東京から 大阪までは 五百五十軒ばかり あります。

「から」の「で」

(ろ) 友達が 待つて ゐるから、早く 行かう。

あまり 暑いから(ので) 途中で しばらく 休みました。  
さつき 雨が 降つたから(ので)、かう 涼しいのです。

右の如く「から」は動詞、形容詞、助動詞の第三形に附けて、理由、原因を示すに用ひます。この場合に「からの代りに」の「で」を用ひることがあります。

「から」

「七二」「さへ」

(い) 忙しくて 御飯さへ ゆつくり 食べて ゐられない。

うちにばかり 居て、隣に さへ 行かない。

右の如く「さへ」は、一事を擧げて他を類推させるのに用ひます。

(ろ) そばに 見て ゐた 私さへ 悲しく なりました。

そんな ことを いふと、子供にさへ 笑はれますよ。

右の如く「さへ」は、動作、事情の到り及ぶ點を表すに用ひます。

(は) 雨さへ 降らなければ、明日 出かけませう。

弟は汽車のおもちゃさへあれば、一人で遊んでゐます。右の如く「さへ」は、それと限つて他を顧みない意味を表します。これは多く條件の文に現れます。

「しか」

「七三」「しか」

「あの町には、小學校も、中學校も、ありますか。」いえ、小學校しかありません。

右の「小學校」かありませんは、あるのは小學校だけであるの意味であります。即ち「しか」は打消の語と共に用ひられて、肯定を表すことになります。

次の例も同様です。

私は、日本語しか知りません。

中村は蜜柑しか食べなかつた。

途中に、三人にしか遇はなかつた。

正月までは、十五日しか無い。

「だけ」

「七四」「だけ」

「だけ」の主な用ひ方は、次の通りです。

東京には、一度しか行つたことが無い。

中村だけは、そんな事は、しないだらう。

田中へだけ電報で知らせませう。

曇つてゐるだけで、雨は降りませんでした。

私は、見てゐるだけで、手傳はなかつた。

この果物は、色が美しいだけで、おいしくはありません。

右の如く「だけ」は、それと限る意味を表すに用ひるのが普通ですが、また次のやうに、限度を示すに用ひます。

荷物は、手に持てるだけ、持つて下さい。

歩けるだけは、歩きませう。

旅行に、いるだけの物は、もう買ひました。

出来るだけ、がまんなさい。

「たり」

言ひたいだけのことは、言はせるがゐる。

「七五」「たり」

「たり」は並列するに用ひる助詞で、その接續は「た」と同様です(二八)(二九参照)。即ち動詞・形容詞及び或種の助動詞の第二形または第五形だけに附きます。第五形に附くと「たり」となることがあります。

昨日は 映畫を 見たり 音楽を 聞いたり しました。  
 大きな 聲で 歌つたり 騒いだり しました。  
 鉛筆を、 買つたり 紙を 買つたり いろいろ 買つた。  
 みんなが 歌つたり 踊つたり 随分 賑かでした。  
 集まる 者が 多かつたり 少かつたり きまつて ゐません。  
 山の 上は 晴れたり 曇つたり でした。  
 病人は 機嫌が よかつたり わるかつたり です。

「て」

「七六」「て」

「て」は動詞・第一種形容詞及び或助動詞の第二形、若しくは第五形に附けて、次のやうに用ひます。第五形に附くと「て」となることがあります(二九参照)。

(い) 今朝は 五時に 起きて、六時に うちを 出しました。  
 午前に 五時まで 読んで 午後に 十時まで、読みました。  
 あまり 暑くて、外へは 出られません。  
 中村も 先生に ほめられて、たいへん 喜びました。  
 右の如くては、言ひ切らないで次に續けるのに用ひます。

(ろ) まだ 雨が 降つて ゐる。  
 繪は 午前中に 書いて しまひました。  
 紙は 昨日 買つて おきました。  
 机は 隅に 寄せて あります。  
 これを 見て 下さる。

「や」

繪を 書くと、いつも 先生に 見て いたゞきます。  
手荷物 は 私 が 持つて あげませう。  
右の如く「て」は、動詞と動詞との間に置いて、それ等を一語のやうに結びつけるに用ひます。

「七七」「で」

「で」は主として名詞・代名詞に附けて、次のやうに用ひます。

(い) 兄は へやで 本を 読んで ゐます。

私は 途中で 中村に 逢ひました。

うちから 學校までは 十五分で 行けます。

あの 仕事は 十日で 仕上げました。

右の如く「で」は、動作の行はれる場所・所要の時間を示すに用ひます。

(ろ) ペンで 書いた 文章。

「て」「で」

「七八」「でも」「でも」 附「とも」

「でも」は動詞・第一種形容詞及び或助動詞の第二形若しくは

その 紐は 鉄で 切つて 下さい。  
妹は 紙で 人形を こしらへました。  
これは 小麦粉で 造つた 菓子です。  
右の如く「で」は、手段・材料を示すに用ひます。

(は) 昨日は 病氣で 休みました。

今日の 遠足は 雨で やめました。

試験の 準備で たいへん 忙しいのです。

あの 人は 努力で 成功したのです。

右の如く「で」は、原因・理由を示すに用ひます。

(注意) 次のやうに用ひる「で」は、助動詞「だ」の第二形です。(六五参照)

兄は 軍人で、弟は 實業家です。

あれは 海では ありません。

第五形に附きます。第五形に附くと「でも」となることがあります。

「でも」は總ての場合、次のやうに或事柄を述べて、それに拘束されない意味を表します。

(い) 太郎は 疲れても、疲れたとは 言はないでせう。

その 本は 誰が 讀んでも、よく 分らないでせう。

外は 暑くても、出かけませう。

次郎は 叱られても 平氣でせう。

右のやうに「でも」は、或事を假定して、それを條件としていふに用ひます。

このやうな假定に、「とも」または「と」を用ひることがあります。

友達が 何を 言はうとも「と」、氣にかけては いけません。  
中村君が どう しようとも「と」 平氣で ゐるが いい。

「とも」「と」

(ろ) 子供たちは、日が 暮れても 歸らうと しなかつた。

たびたび 呼んでも 返事が なかつた。

何處を、さがしても、中村さんは 見えませんでした。

右の如く「とも」は、過去に用ひることがあります。この場合は「たけれども」の意味になります。

「七九」「と」

「と」は、次のやうに用ひます。

(い) あの へやには 太郎と 次郎が ゐます。

私は 東京と 横濱に 泊りました。

飛行機は 朝と 晩と 二度 飛んで 來ました。

右の如く「と」は、並列する語の間に用ひます。この場合に並列する最後の語にも「と」を附けることがあります。

(ろ) 弟は 妹と 遊んで ゐます。

私は 弟と 叔父の うちへ 參りました。

「と」

武田君が 中村君と 議論を して ぬます。

右の如くとは、動作の相手を示すに用ひます。

(は) あれは 富士山と いふ 山です。

私は 中村と 申す もので ございます。

あのかたが 武田さんと おつしやる かたです。

右の如くとは、事物の名を示すに用ひます。

(に) 私も 武田君は りつばな 人だと 思ひます。

弟は そんな ことは 無い。と 言ひました。

「あなたは どなたですか。」と 尋ねたら、「春山太郎です。」と 答へた。

右の如くとは、思ふ言ふなどの内容を示すに用ひます。

(は) 始が よいと 終も よい。

つらい ことも、慣れると つらく なくなる ものです。

妹は 笑はれると、すぐ 泣き出します。

右の如くとは、条件を表すに用ひます。この場合とは、動詞・形容詞或助動詞にだけ附きます。

(へ) 昨日は、日が 暮れると、急に 涼しく なりました。

太郎は 私を 見ると、大急ぎで かけて 來ました。

今朝 海岸に 行くと、大きな 船が 見えました。

右の如くとは、下に述べる事が、どんな場合に起つたかを示すに用ひます。

「ハ○」な

もう 泣くな。

そんな 物は 二度と 見るな。

人の いやがる ことは するな。

子供たちに、そんな 物は、食べさせるな。

右の如くなは、動詞或助動詞の第三形だけに附けて、その動

「な」

作を禁止するのに用ひます。

(注意) 右の「な」を用ひる言ひ方には、丁寧の意味がありません。談話で禁止の意味を表すには、丁寧の意味を含んだ「はいけません」を用ひます。

そんな物を 見てはいけません。

人の いやがる ことを してはいけません。

子供たちに そんな物を 食べさせてはいけません。

「に」

「八一」に

「に」は主として名詞・代名詞に附けて、次のやうに用ひます。

(い) 山の 下に 家が あります。

父は 庭に をります。

新聞は ここには 無い。

中村さんも 東京に 住んで をります。

先生の 御話は 八時に 始まつて 九時に 終わりました。

兄も 夕方には 歸りませう。

武田さんは 來月三日に 御出發なさるさうです。

右の如く「に」は場所・時を表すに用ひます。

(ろ) 武田君が 級長に なるでせう。

田中さんは、長男を 軍人に すると 申します。

會場は 講堂に 變りました。

右の如く「に」は化成の結果を表すに用ひます。

(は) これは 洗濯に 使ふ シャボンです。

私は 買物に 行きます。

友達が 私を 迎へに 來ました。

太郎を 呼んで、様子を 見に やりませう。

右の如く「に」は動作の目的を表すに用ひます。

(に) 生徒に 校歌を 歌はせませう。

女中に 窓を あけさせる。

右の如くには、使役の叙述において、使役されるものを表します。即ち右の文で、使役されて「歌ふ」あけるといふ動作をなすものは、生徒「女中」です。

(ほ) 中村君は いつも 先生に ほめられます。  
私は 叔父に 育てられました。

右の如くには、受身の叙述において、その動作をなす者を表します。即ち右の文で「ほめる」「育てる」といふ動作をなすものは、先生「叔父」です。

(へ) この 町は 海に 遠い。  
私の 家は 學校に 近い。  
太郎は 母に よく 似て ゐます。

右の如くには、「遠い」「近い」「似る」などの基準を示すに用ひます。

[8]

「八」の

「の」には次のやうな用ひ方があります。

(い) 太郎の 帽子。 あなたの 本。 私の 鉛筆。 學校  
の 門。 机の 上。 室の 外。 あそこの 山。

右の如く「の」は、他の語に附けて、下にある名詞に對する修飾語を作るに用ひます。

この「の」の下の名詞が、次のやうに略されることがあります。

この 帽子は、あなたの(帽子)ですか。  
今日の 映畫は、昨日の(映畫)よりも面白い。  
(ろ) 生徒たちの 讀む 本は これです。  
雨の 降り出した 時は、何處に をりましたか。  
山の 下に、水の きれいな 川が あります。

右の如く「の」は、主語に附くことがあります。

この場合の主語(生徒たち・雨水)に對する述語(讀む・降り出し

たきれいなは、下の名詞「本時川」に續いてゐるのが普通です。

(注意) 右の場合、述語が下に續いてゐない時は、主語の下に「が」を附けるのが普通です。(七〇の(イ)参照)

(は) お茶の 飯みだい かたは、こちらへ お出でなさい。

繪本の ほしい かたには、これを 上げませう。

お菓子 の 嫌ひな 子供は、多くは、ありません。

右の如く「の」は、望み、好み、及びその反對の語に對して、その對象となる事物を表すに用ひます。この場合にも述語が名詞に續いてゐます。「述語が下に續いてゐない時は、がを附けるのが普通です。(七〇の(イ)参照)

(に) あそこ に ゐるのは 誰ですか。

太郎の 買つたのは 何でせうか。

弟の 泣くのに 困りました。

この 本の むづかしいのには 驚きました。

私は 笑ひたいのを、こらへてゐた。

右の如く「の」は、動詞・形容詞や、それ等に助動詞の附いたものの下に置いて、それらに名詞の資格を與へるのに用ひます。即ち右の「あるの」「買つたの」「泣くの」「むづかしいの」「笑ひたいの」は、それぞれ「ある人」「買つた物」「泣くこと」「むづかしいこと」「笑ひたいこと」の意味であります。

[七九]

「八三」「の」

私が 丁寧に 教へるのに、太郎は 覺えようともしない。

外は 暑いのに、子供たちは 平氣で 遊んで ゐる。

私が とめたのに、太郎は 外へ 出て 行つた。

次郎は 映畫が 好きなのに、近頃は 少しも 見ない。

右の如く「の」は、動詞・形容詞及び助動詞の第三形だけに附けて、それに拘らない意味を表すに用ひます。

「は」

「八四」「は」

「は」は特に取り立てていふに用ひる助詞であつて、いろいろの場合があります。その主なものは次の通りです。

(い) 鐵は 堅い。

象は おだやかな 動物です。

海の 水は しほからむ。

日本語は むづかしくは ありません。

右の如く事物の性質を説明する場合には、之を主語として「は」を附けるのが普通です。

(ろ) 私は 歸りますが、あなたは どう なさいますか。

世の 中に 人は 多いが、えらい 人は 少い。

東京には 海が あるが、京都には 無い。

兄は コーヒーが 好きで、弟は 紅茶が 好きです。

右の如く「は」は二つ以上のものを對照して擧げるのに用ひます。

(は) (雨は) いま 降つては ありません。

(私は) 酒は 飲みません。

あそこも あまり 涼しくは ないでせう。

いいえ、さうでは ありません。

中村君からは、何も 聞いて ない。

右の如く打消の文には「は」を用ひるのが普通です。

(に) 象は 鼻が 長い。

あの 川は 水が きれいです。

私は 心持が 悪く なりました。

弟は 私よりも せいが 高いのです。

右の如く「は」は主語と述語とを與へたもの(○印)を述語とする主語に附きます。右第一例でいへば、象は「は」主語で、鼻が長

い」が述語です。さうしてその述語は、主語、鼻が、述語、長い」から出来てゐます。

(ほ) 中村へは 電話で 知らせました。

田中からは 返事が 来ました。

南洋の 海には、魚の 種類が 多い。

大阪の 町も 東京よりは 小さい。

教へ方が 丁寧では あるが、なかなか 覚えられない。

右の如く「は」は普通の肯定であつても、特に取りあげていふ語の下に附けて用ひます。

「八五」「は」 附し

「は」は動詞形容詞及び或助動詞だけに附けて、次のやうに用ひます。

い 條件を表します。

(1) 明日 雨が 降れば、うちに およう。

その 本が 面白ければ、私も 買ひませう。

あなたも 讀みたければ、私が お貸し致しませう。

などは或事を假定して、それを條件として表し、

(2) 人を 悪く いへば、人に 悪く いはれる。

始が よければ、終も よい。

人が 多ければ、相談が まとまりにくい ものです。

などは、いつも相伴なふ二つの事柄の、條件となるものを表します。

(注意) 右(1)の場合に「は」が第二種形容詞・助動詞「た」だの第四形「なら」

「たら」ならに附く時は「は」が略されることがあります、(四五)の(注意)

「六四」の(5)「六五」の(6)参照

道が たひらなら(ば)、車で 行きませう。

誰か 来た(ら)ば、私に 知らせて 下さう。

「ば」「し」

(ろ) あれが 茶店ならは、行つて 休みませう。  
並列に用ひます。この場合には第三形に助詞「し」を附けてもいひます。

中村は、タイ語も 話せば話すし、タガログ語も話します。

中田は、頭もよければよいし、身體も 丈夫だ。

昨日は 父にも ほめられればほめられるし、兄にも ほめられました。

「ばかり」

「八六」「ばかり」

「ばかり」は次のやうに用ひます。

學生が 二十人ばかり ゐます。

私は 一時間ばかり 待ちました。

あそこまでは 三軒ばかり あります。

この 瓶には、水が ニリットルばかり はいります。

右の如く「ばかり」は、數量を大概にいふに用ひます。

「へ」

「八七」「へ」

「ばかり」はなほ次のやうに、それと限る意味に用ひることがあります。

あの 人は 口で 言ふばかりで、實行しない。

私は 電車にばかり 乗つて、バスには 乗りません。

小さい 弟は、泣いてばかり ゐます。

「へ」は移動を示す動詞と共に、次のやうに用ひます。

(い) 太郎は 海の方へ 行きました。

飛行機が 東へ 飛んで 行きました。

あなたは こちらへ お出でなさい。

少し 前へ 出て 下さい。

右の如く「へ」は、方角を表すに用ひます。

(ろ) ちよつと 此處へ お出でなさい。

私は 五時に うちへ 歸ります。

「も」

鉛筆は 机の 中へ 入れました。  
 蠅が 葉子の 上へ とまりますから、追つて 下さる。

右の如く「へ」は、動作の歸着する所を表すに用ひます。

(は) あの本は 友達へ 貸しました。

あなたへは 繪本を 上げませう。

私も 中村へ 話しました。

あなたへ 御願ひします。これを 田中へ やつて 下さる。

右の如く「へ」は、動作の相手を示すに用ひます。

「八八」「も」

「も」は次のやうに用ひます。

(い) 私も 鉛筆を 買ひませう。

中村君は 南京へも 行きました。

私は 田中とも 話しました。

右の如く「も」は、一を擧げて他を推測させるに用ひます。

「より」

この「も」は疑問の代名詞に附くと、次のやうに、全部を包括した意味となります。

室の 中には 誰も いません。

カバンの 中には 何も 無い。

映畫館は どこも 満員です。

(ろ) 富士山の 上には、木も 草も ありません。

私は 酒も 煙草も 嫌ひです。

電報は 中村君からも 田中君からも 來ました。

私は 北京へも 南京へも 行きました。

あの 池は あまり 大きくも 深くも ありません。

右の如く「も」は、累加に用ひます。

「八九」「より」

「より」には次のやうに、二つの用ひ方があります。

(い) 鐵は アルミニウムより(も) 重い。

「を」

今日は 昨日より(も) 暑い。  
私は 弟より(は) 早く 起きます。  
その 帽子は 十圓より(は) 高く ないでせう。  
右の如く(より)は、比較の基準を示すに用ひます。この場合、  
下に「も」は等の附くことが多いのです。

(ろ) この 町には 公園より(ほか) 見る 所が ありません。  
私は 日本語より(ほか) 知りません。  
北京へは 一度より(ほか) 行つた ことが ありません。  
蜜柑は 五つより(ほか) 残つて ゐない。  
泣くより(ほか) しかたが なかった。

右の如く(より)は「しか」(七三参照)と同様に用ひます。この場  
合、下に「ほか」を附けることが多いのです。

(注意) 右の「ほか」を「ほか」にともいひます。

「九〇」「を」

「を」は次のやうに用ひます。

(い) 門を 開く。

本を 買う。

木を 植ゑる。

窓を しめる。

茶を 飲む。

右の如く「を」は動作の対象を表すに用ひます。これは他動  
詞(二五参照)を用ひる場合です。

この「を」はまた次の例のやうに、使役の意味の叙述において  
自動詞の表す動作の主を示すに用ひます。

生徒を 三十分 休ませました。

美しい 花を 咲かせた。

妹を 途中から 歸らせました。

右の文において「休む」「咲く」「歸る」といふ動作をなすものはそ  
れぞれ「生徒」「花」「妹」です。

階子を  
上る。

橋を渡る。

廊下を走る。

空を飛ぶ。

學校の前を通る。

坂を下る。

室を出る。

山道を行く。

門を  
はいる。

右の如く「を」は、動作の行はれる場所を表すに用ひます。これは自動詞(二五参照)を用ひる場合です。

附錄

[illegible]

第一表 動詞活用表

| 種類  | 段  |    |    |    |    |    |    |    |    |     |    |     |     |     |     |    |     |     |    |     |    |     |     |     |     |     |     |    |     |     |     |     |     |     |    |    |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|
| 例   | 四  |    |    |    |    |    |    | 上  |    |     |    |     |     |     | 一   |    |     |     |    |     |    | 下   |     |     |     |     |     |    | 一   |     |     |     |     |     |    |    |
| 語   | 書く | 泳ぐ | 増す | 立つ | 死ぬ | 歌ふ | 飛ぶ | 讀む | 乗る | 悔いる | 着る | 過ぎる | 案じる | 落ちる | 閉ぢる | 煮る | 用ひる | 伸びる | 見る | 下る  | 居る | 消える | 受ける | 投げる | 載せる | 交ぜる | 捨てる | 出る | 尋ねる | 加へる | 述べる | 沈める | 忘れる | 植ゑる | 来る | 爲る |
| 第一形 | 書か | 泳が | 増さ | 立た | 死な | 歌は | 飛ば | 讀ま | 乗ら | 悔い  | き  | 過ぎ  | 案じ  | 落ち  | 閉ぢ  | に  | 用ひ  | 伸び  | み  | 下り  | ゐ  | 消え  | 受け  | 投げ  | 載せ  | 交ぜ  | 捨て  | で  | 尋ね  | 加へ  | 述べ  | 沈め  | 忘れ  | 植ゑ  | こ  | し  |
| 第二形 | 書き | 泳ぎ | 増し | 立ち | 死に | 歌ひ | 飛び | 讀み | 乗り | 悔い  | き  | 過ぎ  | 案じ  | 落ち  | 閉ぢ  | に  | 用ひ  | 伸び  | み  | 下り  | ゐ  | 消え  | 受け  | 投げ  | 載せ  | 交ぜ  | 捨て  | で  | 尋ね  | 加へ  | 述べ  | 沈め  | 忘れ  | 植ゑ  | き  | し  |
| 第三形 | 書く | 泳ぐ | 増す | 立つ | 死ぬ | 歌ふ | 飛ぶ | 讀む | 乗る | 悔いる | きる | 過ぎる | 案じる | 落ちる | 閉ぢる | にる | 用ひる | 伸びる | みる | 下りる | ゐる | 消える | 受ける | 投げる | 載せる | 交ぜる | 捨てる | でる | 尋ねる | 加へる | 述べる | 沈める | 忘れる | 植ゑる | くる | する |
| 第四形 | 書け | 泳げ | 増せ | 立て | 死ね | 歌へ | 飛べ | 讀め | 乗れ | 悔いれ | され | 過ぎれ | 案じれ | 落ちれ | 閉ぢれ | にれ | 用ひれ | 伸びれ | みれ | 下りれ | ゐれ | 消えれ | 受けれ | 投げれ | 載せれ | 交ぜれ | 捨てれ | でれ | 尋ねれ | 加へれ | 述べれ | 沈めれ | 忘れれ | 植ゑれ | くれ | すれ |
| 第五形 | 書い | 泳い | 〇  | 立つ | 死ん | 歌っ | 飛ん | 讀ん | 乗っ | 〇   | 〇  | 〇   | 〇   | 〇   | 〇   | 〇  | 〇   | 〇   | 〇  | 〇   | 〇  | 〇   | 〇   | 〇   | 〇   | 〇   | 〇   | 〇  | 〇   | 〇   | 〇   | 〇   | 〇   | 〇   | 〇  | 〇  |

第二表 形容詞活用表

| 種類  | 第一形 | 第二形 | 第三形 | 第四形 | 第五形 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 第一形 | 美しい | 寒い  | 美しい | 寒い  | 美しい |
| 第二形 | 美しく | 寒く  | 美しく | 寒く  | 美しく |
| 第三形 | 美しく | 寒く  | 美しく | 寒く  | 美しく |
| 第四形 | 美しく | 寒く  | 美しく | 寒く  | 美しく |
| 第五形 | 美しく | 寒く  | 美しく | 寒く  | 美しく |

○第一・四・五形には便宜上、下に附く語を記入した。

第三表 助動詞活用表

| 語    | 第一形  | 第二形  | 第三形  | 第四形  | 第五形  |
|------|------|------|------|------|------|
| れる   | れる   | れる   | れる   | れる   | れる   |
| られる  | られる  | られる  | られる  | られる  | られる  |
| せる   | せる   | せる   | せる   | せる   | せる   |
| させる  | させる  | させる  | させる  | させる  | させる  |
| ない   | ない   | ない   | ない   | ない   | ない   |
| たい   | たい   | たい   | たい   | たい   | たい   |
| ます   | ます   | ます   | ます   | ます   | ます   |
| た    | た    | た    | た    | た    | た    |
| ぬ(ん) | ぬ(ん) | ぬ(ん) | ぬ(ん) | ぬ(ん) | ぬ(ん) |
| だ    | だ    | だ    | だ    | だ    | だ    |
| です   | です   | です   | です   | です   | です   |
| う    | う    | う    | う    | う    | う    |
| よう   | よう   | よう   | よう   | よう   | よう   |

○第五形の欄には、便宜上、下に附く語を附記した。

○「う」は語形に變化がないが、相當欄に記入した。

昭和十八年十月二十日印刷  
昭和十八年十月二十五日發行

日本文法教本  
總定價 五拾五錢

發行者

東京都麹町區霞ヶ關三丁目四番地  
日本語教育振興會  
代表者 長沼直兄



印刷者

東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
(東東一)大日本印刷株式會社  
代表者 杉山退助

發行所

東京都麹町區霞ヶ關三丁目四番地  
日本語教育振興會  
銀座(57)八四五〇番



